

魔導士ルーファス外伝

秋月あきら

ローゼンクロイツのお使い

何の変哲もない森。

しかし、ローゼンクロイツの瞳に映る五芒星ペンタグラムは知っていた。

たとえ魔術により、この森全体の空間が歪曲してしようと、ローゼンクロイツのエメラルドグリーンエメラルドグリーンの瞳は、正しい森の姿を映し出す。

ローゼンクロイツは知っている。自分に見えないものがないことを。

日傘を差しながら小道を正確な步調で歩いていたローゼンクロイツの瞳に生物が映った。

生物と言ってもたんぱく質などの有機物で構成されたナマモノではなく、鉄やプラスチックなどの無機物で構成された生物だ。

ローゼンクロイツは知っている。これが魔法生物と言われる存在であることを。

魔法生物が口を聞く。

「人間がシモンの里になんの用テポ」

カスターネットの上に真ん丸の目玉を二つ付けたような生物が、口らしきものをパクパクさせながらしゃべっている。

なにを思ったのかローゼンクロイツは、一瞬だけ口を歪ませたあざ笑ったような表情をし、すぐに無表情に戻して誰に言う

3 魔導士ルーファス外伝

でもなく呟いた。

「こんな変てこな生物を作るなんて、キミに創造主は変てこだね（ふにふに）」

「マスターに向かつて変てこは、許さないテポ！」

口をパクパクさせるカスタネットオバケは、その口を大きく開けてローゼンクロイツに噛み付こうとした。その口に挟まれたら、ローゼンクロイツの頭なんて丸呑みされてしまう。それほど大きなガマ口だった。

けれど、ローゼンクロイツは知っている。

「……ガマ口（ふっ）」

その一言だけだった。ローゼンクロイツは相手の痛いところをピンポイント攻撃したのだ。

カスタネットオバケ的シヨック！

一番言われたくなかったことを言われてシヨック！

立ち直れないくらい大シヨック！！

ローゼンクロイツの精神的攻撃を受けたカスタネットオバケは、地に沈んで行きそうな勢いでブルーな気分になってしまった。

「な、なんで、それを知ってるテポ（仲間と言われて一番シヨックだった言葉テポ）」

「……なんとなく（ふあふあ）」

カスタネットオバケ返す言葉なし！

灰になって燃え尽きたげって感じのカスタネットオバケをよそに、ローゼンクロイツは歩みを進めた。

4 魔導士ルーファス外伝

森は深く、けれど嫌な感じはせず、木漏れ日が温かい。

シモンの隠れ里。

そこは七英雄のひとり傀儡師シモンの隠れ里。

ローゼンクロイツが里に入ったとたん、里に住む魔法生物たちが騒ぎ出した。

楽器や玩具やポットみたいな日常品まで、シモンによって命を吹き込まれた魔法生物たちに取り囲まれ、ローゼンクロイツは足を止めた。

「人間がこの里になんのようだっちゃ」

魔法生物の一匹が言った。

「人間なんて嫌いデポ」

魔法生物の一匹が言った。

「人間はみんな嘘つきだに」

魔法生物の一匹が言った。

三匹が言い終えたところで、ローゼンクロイツが呟いた。

「キミたちのマスターも人間だろ（ふにふに）」

クリティカルヒット！

魔法生物たち返す言葉ナツシング！

氷のように固まってしまった魔法生物を無視して、ローゼンクロイツは歩みを進めた。

その先に見える影。

ローブを着た長身の青年が立っていた。

微笑を湛えてはいるが、眼鏡に奥に光る眼光がただの青年でないことを物語っている。

傀儡師シモン。

「こんにちは、若者よ」

春風のような声がローゼンクロイツの耳をくすぐった。

「こんにちは、傀儡師シモン（ふあふあ）」

こちらは空に漂う雲のような声だった。

「なんの用かな、探求者よ？」

「マスタードラゴンの鱗を獲りに来たんだ（ふあふあ）」

「ふむ、この森に住むマスタードラゴンが、マスター・オブ・

ザ・マスタードラゴンであることをご存知ですか？」

「知ってるよ、世界に一〇〇匹としないマスタードラゴンの中でも、その頂点に立つ七匹のドラゴン（ふにふに）。この森に住むドラゴンは精霊エントの守護を受けたエントドラゴン（ふあふあ）」

「そこまでわかっているのなら、お帰りなさい」

「……拒否（ふっ）」

ドラゴンの中でも、長い時を生きた智慧と力を持った老竜をマスタードラゴンと云う。マスタードラゴンは魔導にも精通し、その知識を求める魔導師も少なくない。そのマスタードラゴンの中でも、絶大な力を有するドラゴンこそがマスター・オブ・ザ・マスタードラゴンである。

マスター・オブ・ザ・マスタードラゴンは世界に五体存在し、別名 精霊竜 とも呼ばれ、身体に宿す精霊の力によって呼び名が異なる。

この森に隠れ棲む 精霊竜 は、身体に精霊エントの力を宿

したエントドラゴンだ。

短く『拒否』と言い切ったローゼンクロイツは、古の時代に英雄とまで呼ばれたシモンを苦笑させ、さっさと歩き去ろうとした。

「……じゃ（ふあふあ）」

「少し待ちたまえ、ローゼンクロイツ君（世界でも数少ない聖眼の使い手、人間よりも僕たちに近い存在だ）」

“名前”を呼ばれローゼンクロイツの耳が微かに動くが、それでも彼は歩みを止めようとせず、シモンの隠れ里を抜けエントドラゴンの元へ行こうとした。

しかし、春風駘蕩とした傀儡師シモンの口から、ローゼンクロイツへの攻撃が炸裂した。

「本名で呼び止めましようか？」

この言葉を聞いた瞬間、ローゼンクロイツの足はピタツと静止し、歩兵が回れ右をするみたいに中心軸をまったく動かさずにシモンの方を振り返った。

「……それは嫌（ふにゃ〜）」

あからさまに嫌な顔をするローゼンクロイツ。ワザとらしいまでに眉をひそめるその仕草は演技っぽさを感じるが、足を止めて振り返ったということは本当に嫌なのかもしれない。

空色のドレスを着た変人は、クリスチャン・ローゼンクロイツという名で通っている。その名についているクリスチャンとは、つまり聖職者を意味し、ローゼンクロイツとは本名ではなく洗礼名のことである。

世界に数ある宗教の中でも、大きな規模を持つ　ガイア聖教　の信者。それがクリスチャン・ローゼンクロイツだった。嫌な顔から無表情に戻したローゼンクロイツは、人差し指を立てて軽く唇に当てた。

「本名は捨てたよ（ふあふあ）。言ったら屠るからね（ふーっ！）」

屠る　つまり、里に住む全員を皆殺しにするという殺戮宣言だ。これを感情のこもつてない声で淡々と、無表情で言うもんだから、怖いつたらありやしない。聖職者というのは嘘で、異端児なのかもしれない。かもというより、絶対異端児だと思っ。

ローゼンクロイツを知る者であれば、これ以上はローゼンクロイツに手出しはしない。少なくともルーファスは、絶対にローゼンクロイツに喧嘩を売って命を粗末にする真似はしない。だが、相手は今となっては伝説として語られ歴史の隅に追いやられた英雄であっても、その実力たるは世界を変えることのできる存在だ。

「エントドラゴンに会わせるわけにはいきません。お引き取りなさい（と言っても、簡単に聞き分けてはくれないでしょうughどね）」

「……拒否（ふっ）」

またもやローゼンクロイツは相手の言葉を簡単に跳ね除けた。相手が英雄であろうが、彼にとってはみな同じなのかもしれない。

「拒否といわれても、こちらとしてはドラグナーとしての立場もありますゆえ、そう易々とエントドラゴンに会わせるわけにもいきません」

「それは困る（ふにゃ〜）。鱗を一枚もらえないと困る（ふにゃ〜）」

「どうしてマスタードラゴンの鱗が必要なのですか？」

「出席日数が足らなくて進級できないらしい（ふ〜っ）。知り合いのへっぼくんは五年生に上がったのに、ボクは四年生のまま……ちょっと自分に苦笑（ふ〜っ）」

「それでマスタードラゴンの鱗がどんな関係が？（世俗に囚われない物腰をしている青年なのに、なんとも世俗的な話なのだろうか）」

「教師たちはボクにもう一度四年生をやれと言ったけど、それは嫌（ふ〜っ）。だから進級するためにマスタードラゴンの鱗で手を打ってもらうことにしたんだ（ふにふに）」

事は一週間ほど前に遡る。

新年度がはじまっても学院に顔を出さないローゼンクロイツに、至急学院に來いと連絡があった。

学院に呼び出されたローゼンクロイツは、そこで進級できていないことを告げられたのだ。ちなみに、そんなことを告げられてもローゼンクロイツは、いつもどおり無表情だったことは言うまでもない。

裏の山口を知っているローゼンクロイツは、進級できないと告げられても焦ることもなく、さっそくその足で魔導学院の教

師カーシャのもとへ向かった。

学院内でもカーシャの地位は、決して生徒から慕われるものではないが、通常ではどうにもならないようなトラブルを解決してくれることから、生徒たちにとってはなくてはならない教師なのだ。もちろん、トラブル解決には、それなりの代償を支払わなければならない。

今回は特別出血大サービスで、マスタードラゴンの鱗で勘弁してやろう。

これがカーシャの提示した代償だった。

そして、ローゼンクロイツはマスタードラゴンの鱗を取ってくることを承諾したのだった。

ローゼンクロイツがマスタードラゴンの鱗を欲している理由を聞いたシモンは、一息ついて時間を空けたあと、笑みを湛えながら口を開いた。

「いいでしょう、エントドラゴンに会わせましょう。ただしエントドラゴンは人間がとても嫌いです」

「知ってるよ（ふあふあ）。木の精霊エントの力を宿すエントドラゴンは、自然を蝕む人間が大っ嫌いなのは有名な話だね（ふにふに）」

「せめてガイアではなく、エントに来ていただければよかったですかね」

今日は世界的に休日のガイアという曜日当たる。エントは精霊の名であると共に、一週間の第五日目を守護し、その日の名称にもなっている。

今までずっとローゼンクロイツとシモンの会話を見守っていた魔法生物が、あわてた感じで口をパクパクさせながら二人の間に割り込んできた。

「ダメだテポ、人間をエントドラゴン様に会わせちゃダメだテポ」

「うるさいよ、ガマロ（ふっ）」

ローゼンクロイツの精神攻撃がまた決まった！

こうしてまたカスタネットオバケは地面沈んで再起不能にされたのだった。

コンコンというノックが聞こえ、カーシャはそのノックをした人物が誰かすぐにわかった。

「クリスちゃんだな、鍵は開いている、入って来い」

ガチャッとドアノブが音を立て、いつもと変わらぬ空色ドレスのローゼンクロイツがカーシャの研究室に入ってきた。

「獲って来たよ（ふあふあ）」

その手には、ローゼンクロイツの顔よりも大きな木の葉が持たれていた。

「なんだ、その枯れ葉は？（焼き芋のシーズンはまだ先だぞ）」

「魔女が取って来いってボクに言ったの、忘れたのかい？（ふにふに）」

「枯れ葉を取って来いなど、私は言った覚えなどないが？」

「よく見ればわかるよ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツに木の葉を渡せれ、カーシャは眉をひそめたが、すぐにその表情は驚愕へと変わった。

「ま、まさかエントドラゴンの鱗か!？」

「そうだよ（ふあふあ）。だって魔女がボクにマスタードラゴンの鱗を取って来いって言ったんじゃないか?（ふにふに）」

「戯け者かお前は……（たしかにマスタードラゴンの鱗を取って来いとは言ったが、まさかマスター・オブ・ザ・マスタードラゴンの鱗を取ってくるとはな……ふふ）」

エントドラゴンの姿はまるで木の葉の山のようにであると伝えられている。木の精霊エントの力を身体に宿したエントドラゴンは、その身体の一部を植物と化し、鱗は全て木の葉でできているのだ。

マスタードラゴンの鱗を約束どおりカーシャに渡したローゼンクロイツの姿は、すでにドアの近くにあり、カーシャに背を向けていた。

「じゃ、進級の件よろしく（ふあふあ）」

「進級ではなく、飛び級をさせてやってもいいが?（エントドラゴンの鱗ならば、進級以上の価値はある）」

「五年生でいいよ（ふあふあ）。五年生にはボクのライバルがいるからね（ふにふに）」

無表情な顔についた口が一瞬だけ歪み、すぐに無表情に戻る。そして、もう一度笑った。その笑みはいつものあざ笑いではなく、青空に浮かぶ太陽のような微笑みだった。しかし、その表情は背中越しだったためにカーシャは見ることはできなかった。

もし、その表情を見ていたら、今夜のカーシャは眠れぬ夜を過ごしたに違いない。

「ところでクリスちゃん、どうやってこの鱗を手に入れたのだ？」

「……企業秘密（ふっ）」

「……なっ？（企業秘密だど!）」

「じゃ（ふあふあ）」

ローゼンクロイツは部屋を出て行き、残されたカーシャはローゼンクロイツがどうやってエントドラゴンの鱗を手に入れたのか、結局、眠れぬ夜を過ごすことになるのだった。

悪霊の棲む古城

国王クラウスはアステア国境近くの辺境で一五歳の誕生日を迎えた。

この辺りで紛争が起きたのは十数年前。奴隷として扱われていた種族たちが叛乱を起こしたのだ。

戦いでは多く死者を出し、奴隷達が自由を獲得して戦いは終戦を迎えた。しかし、争いの代償は、綺麗な野原を焼け野原に変え、隣国との貿易が盛んで栄えていた街は廃墟と化して、賑やかさから一変して死の町と化してしまった。

人の住まなくなった町や周辺の土地には怪物たちが跋扈するようになり、アステア王国からも忘れられた土地となっていた。クラウスはこの土地を再建するために視察に来たのだ。

「……静かだな（聴こえるのは雨の音のみか）」

人のいない町を高台から見下ろしたクラウスは呟いた。雨が町の情景をよりいっそう寂しいものにしていった。

屋根や壁は剥げ落ち、所々砲撃か魔導で穿たれた壁や地面の穴。あのような建物では雨風すら凌げまい。

「多額の復興費用と大勢の人手が要りそうだな」

漏らすように言うクラウスの傍らで、白銀の軽鎧を着たブロードの女が立っていた。クラウスがもっとも信頼を置くエルザだ。

「元老院にまた反対されるのは目に見えております」

「この場所に金をかけるくらいなら、ガイア聖教に寄付をしると言い出すだろうな。だが、この場所は必ず貿易経済の拠点となる。長い目で見れば良い投資になることは間違い（彼らは自分が生きている間の保身しか考えないんだ）」

「復興までに十年以上、貿易が軌道に乗るまでにはそれ以上の年月が掛かるやもしれません」

「僕が玉座に座っている間にはなんとかなるさ」

若い王に仕えるエルザはクラウスよりも四歳年上だ。

エルザは名門クラウス魔導学院を首席で卒業し、高級官僚に必要な試験もストレートでパスして、王宮に務めるようになった。それから出世の道を進み、クラウス王国が外国に派遣した部隊に所属していたエルザは、そこで大きな功績を残したことよって魔剣一個中隊の中隊長に任命された。

戦争がないときは、エルザはクラウスの護衛役を務め、どこに行くにも共に行動をする。そのためエルザには悪い噂が付きまとう。クラウスの女だからスピード出世するのだと。

嫉まれることも多いが、エルザはそんなことなど気にもかけていない。それに彼女にはそれ相應の実力があるのだ。

今回の視察はエルザを加えて少ない人数で来た。他の者達を近くの町の宿で待機させ、この場所にはエルザと二人できた。

危険の多い場所だが、エルザの実力を知るものなら、安心して君主を任せられる。

クラウスは見下ろしていた町から目を離し、来た道を戻り緩

やかな崖を下りはじめた。

「風邪を引く前に宿に戻るう」

王についてすぐ後ろ歩くエルザがふと足を止めて辺りを見回す。

「人の声が聞こえます」

「ん？」

クラウスも耳を澄ませ辺りに目を配った。

女の叫び声がある。

崖の下にある町からだ。

すぐにクラウスとエルザは崖の下に目を向けた。

襜褕を纏った三体のアンデッドが女性を襲おうとしている。

エルザよりも先に行動に出たのはクラウスだった。

クラウスは剣の柄に手をかけながら、急な斜面を滑り降りた。

そのあとを慌ててエルザが追う。

「クラウス様！（クソッ！）」

声をあげたときにはクラウスは崖を降りて剣を抜いていた。

王家に伝わる名も無き長剣。

抜くと同時にアンデッドの胴を真っ二つに断ち、襲い掛かっ

てきた二体目の脳天から股まで剣を振り下ろし、三体目は押し

飛ばすように突き刺した。

アンデッドは通常、斬られたくらいでは倒せず、身体を真っ

二つにさせられても動くことができる。

しかし、クラウスの剣で斬られたアンデッドは傷口から光を

発し、塵となって消滅してしまったのだ。

アステア王国に伝わるこの剣は聖の属性を持っており、アンデッドなどの怪物を浄化させる力を持っているのだ。

クラウドに一步遅れて崖を降りてきたエルザが、気を失って倒れている女性を抱きかかえた。女性は痩せこけた中年女性だった。

「どういたしますか？（クラウド様ならば放っておくはずないが）」

「訊くまでもないだろう。宿に連れて行こう」

「承知しました（やはり、クラウド様だ）」

背中に女性を背負ったエルザとクラウドは足早に宿に向かって足を運んだ。

宿に戻り女性の看病をすると、女性は空ろげな瞳を開けて意識を取り戻した。

「……ここは？」

はつとしたように女性は瞳に光を戻して辺りを見回した。

大きな一室に六人の男女がいた。

クラウドと連れの者達だ。

ベッドに寝かされていた女性の近くには、魔導衣を着たおしとやかそうな女性が立っていた。

「お加減はいかがですか？」

尋ねられた女性はこの状況を把握するのに時間を要した。頭の中が整理できず、なにが現実かも判断がつかない。とても恐ろしいことが起きた。それだけが頭の中で駆け巡っていた。

怯える女性の手を取って、魔導衣を着た女性　魔法医エリ
ーナは優しく微笑んだ。

「わたしたちは旅の冒険者です。あなたがアンデッドに襲われているところを、そこにいるお二方が助けたのですよ」

二人とはもちろんクラウスとエルザのことだ。

自分を助けてくれた二人を見つめ、女性はアンデッドに襲われたことを思い出して叫んだ。

「夫と子供達を助けてください！」

取り乱す女性を落ち着かせ、聞き出した話はこうだった。

クライストン一家は隣国の紛争を免れるためにアステア王国に移住する最中だったらしい。すでに先にアステア領内に入っていた靴職人の夫を追って、クライストン夫人は三人の子供を連れて旅の途中、あの廃墟の町に迷い込んでしまったらしい。

雨が降りしきる中、凶暴で知能もあるキラールウルフの群に囲まれ、逃げ込んだのが町の高台にある小さな居城だった。そこに逃げ込んだのが間違いだった。

古城は廃墟と化しており、そこはアンデッドたちの棲み処と化していたのだ。

アンデッドに襲われたクライストン夫人は子供を連れて逃げることを断念し、仕方なく子供たちを各々の場所に隠して自分は助けを求めに行き途中だったのだという。

話を聞き終えて最初に口を開いたのは軽騎士のオルガスだった。

「ひどい話だな、子供を見殺しにするなんて」

そう取られても仕方ない話だった。子供をアンデッドの巣窟に残してくるなど、とてもではないが得策とは言えない。

オルガスの言葉を聞いたクライストン夫人は泣き崩れてしまった。

庇うようにエリーナが夫人の肩を抱き、オルガスを睨みつけた。

「子供を産まないあなたになにがわかるのですか？」

愛する我が子を置いて行くことが、どれほど辛いだろうか？
両親、そして兄弟と離れ離れになってしまった子供もまた、
どれほど辛い思いをしているのだろうか？

クライストン夫人の決断は身を切る思いだったに違いない。
決して好き好んで子供を置いてきたわけではないのだ。

椅子に腰掛けていたクラウドが立ち上がった。

「今すぐに子供たちを救出に向かう」

嫌な顔をする者は誰ひとりとしていない。事情を聞いたときから、誰もが子供を救出しに行くことを決意していたのだ。

夫人の肩を抱いているエリーナが尋ねる。

「お子さんはどこにいるのですか？」

「長男のトーマは食糧貯蔵庫の中に、次男のケルピンは見張り塔に、長女のアリッサは礼拝堂……」

急にクライストン夫人の身体から力が抜け、意識を失って倒れてしまった。

心労が祟ってしまったのだろう。

子供たちの詳しい位置まで聞き出すことができなかった。だ

いだいの位置は聞き出せたので、あとは人力を尽くすしかない。一刻も早く子供たちを救出しなくては、アンデッドたちの餌食になってしまう。

エルザはここにいる全員に命じる。

「オルガスとエリーナは食糧貯蔵庫を探して長男を救出、バンガードは見張り塔で次男を、私とクラウド様で長女の救出にあたる、いいな？」

皆は深く頷いた。

怖く心細い思いをしている子供達を一刻も早く助け出したい。そんな気持ちで二人の冒険者達の足を速めていた。

探し出す子供の数は三人。

そのためにクラウドたちは三チームに分かれる作戦を実行した。

魔法医エリーナと軽騎士オルガスは暗い廊下を進み、地下貯蔵庫を探して城内を探索していた。

太陽神アウロの守護があるこの時期の雨は恵みの雨とされるが、今日のこの雨は歓迎できるものではなかった。

城内は湿気で満たされ、じめじめした空気をアンデッドたちがとても好みそうだ。

幸いなことにまだアンデッドたちには遭遇していない。

「なかなか見つからないな。子供じゃなくてアンデッドのことな」

アンデッド狩りを楽しみにしているオルガスをエリーナがた

しなめる。

「目的はアンデッド討伐ではありません。子供たちを救出することが最優先です」

「まだ生きてるといいけどな（アンデッドは生者の肉を好むらしいからな）」

「なんてことを！」

「しっ、大きな声を出すとアンデッドたちが起きてくるぞ。オレには好都合だけどな」

貯蔵庫といえば、涼しくて日の当たらない場所にあるだろう。二人は城の北側を中心に貯蔵庫を探し続けた。

やがてかまどなどのある厨房にたどり着いた。

薄暗いこの場所でエリーナはランタンに火を点けた。

「少し肌寒いですね」

「おい、こつちに螺旋階段があるぞ」

「下ってみましょう」

二人は厨房奥の螺旋階段を下ることにした。

手を突いた階段の石壁には苔がむし、冷たい風に乗って腐臭が鼻を衝く。嫌な予感がする。

貯蔵庫で泣き声や微かな物音に気を払うが、どこにいるかわからない。

近くになにかの気配がするが、それが子供のものかアンデッドのものか判断がつかない。

オルガスは鞘からフルーレを抜いて、大きな声をあげた。

「誰かいるのか！」

反応は石蓋の閉められた棺のような箱から返ってきた。中から苦しそうな呻き声が聴こえてきたのだ。

すぐにオルガスが重い蓋を開けると、なんと中からアンデッドが飛び出したのだ。

驚きながらも注意をしていたオルガスは迅速に対処し、フルーレでアンデッドの目玉を突いて、相手が怯んだ隙に石蓋を再び閉めてしまった。

「危なかつたな（……しぶとい奴だぜ）」

石蓋に挟まれて切断されたアンデッドの手が床で微かに動いている。

それを蹴り飛ばして冷や汗を拭いたオルガスが振り返った。

「残りの箱も開けてみるか？」

「お願いします」

他の箱にオルガスが手をかけようとしたとき、二人はなにか嫌な気配を感じて緊張した。螺旋階段を上がったすぐそこになにかが迫っている。

螺旋階段を下りてくるアンデッドの影を見取ったエリーナが手に魔導を集中させる。

「アンデッドはわたしが引き受けます。あなたは子供の搜索を続けてください」

貯蔵庫にアンデッドを近づけないために、エリーナは自ら囹になることを決意して、螺旋階段に向かつて走る。

エリーナの手を淡い光を放った。

「キュアライト」

回復系魔法アイラに属する回復呪文キュアライト。その効果は仲間の傷を癒やし、精神的な落ち着きも与える魔導だ。

普通は回復のために使用する魔導だが、アンデッドに対しては違う。アンデッドには回復呪文が攻撃呪文へと効果を変えるのだ。

キュアライトの光を浴びたアンデッドたちが塵と化して崩れ落ちる。

螺旋階段の先からは次々とアンデッドが降りてくる。

エリーナは螺旋階段を駆け上がっていった。

仲間の作ってくれた隙に、オルガスは残る箱を開けて調べた。

そして、なんと長男のトーマを発見したのだ。

八歳の少年は石の箱の中で身を縮ませ振るえていた。

「おまえを助けに来た。もう心配ない、すぐに母親のもとに連れて行ってやる」

怯えてすすり泣くトーマの視線は泳いでしまっている。恐怖からの放心状態でこうなってしまったのだろう。こんな子供を三人も連れてアンデッドの魔の手から逃げることは難しかっただろう。

オルガスはクライストン夫人の取った方法に批判的であったが、その考えを少し改めることにした。

ようやくアンデッドたちを追い払ったエリーザがこの場に戻ってきた。

「よかった、発見できたのですね」

エリーナは魔導衣の上から羽織っていた薄手のマントをトー

マに羽織らせ、隠し持っていた飴玉をトーマの手に握らせた。

「よく頑張りましたね。私からのご褒美です」

飴玉をもらったトーマに小さな笑みが差した。暗い闇に閉じ込められていた少年に光が戻ったのだ。

オルガスがトーマを背負い貯蔵庫を出ようとしたとき、腐臭が風に乗って漂い螺旋階段からアンデッドたちが姿を見せたのだ。

追い払ったと思ったが、またすぐに集まって来てしまったのだ。

アンデッドに目をやったオルガスはエリーナに悪態をついた。

「おまえが連れてきたんだろ」

「そんなヒドイ！」

「オレはこの子を背負ってるから、あいつらはおまえに任せろぞ」

「言われなくてもわかっています」

逃げ場がない。危機的な状況だ。

しかし、強行突破はできる。

手に魔導を溜めるエリーナを確認し、オルガスは背負っているトーマに向かって言う。

「しっかりと掴まってる、走るぞ」

トーマが頷く前にエリーナの魔導が発動し、オルガスは俊足を生かして駆けていた。

眩い光が当たりに散乱し、塵に還り浄化していくアンデッドたちを乗り越え、二人とひとりの少年は螺旋階段を全力で上っ

た。

降りしきる雨の中、重騎士バンガードは見張り塔に向かっていた。

城の敷地内に建てられた見張り塔は居館に隣接した位置に建てられていた。

塔の入り口は金属製の扉で固く閉ざされ、上を見合わせば窓があるが、下からはこしかり口がない。

ドアを強く叩くが、中からの反応はなかった。

アンデッドに用心しているに違いない。

「助けに来た」

野太い無愛想な声だ。これでは中にいる次男のケルビンも怖がって出て来られないだろう。

バンガードは扉のすぐ向こうから気配を感じていた。

いつ向かいが来てもよいように、扉のすぐ傍にケルビンがいるのだろう。しかし、用心しているのか、反応を押し殺したように静かだ。

もう一度バンガードは扉を叩いた。

「クライストン夫人に頼まれて助けに来た」

夫人の名前を出したためか、今度は中から反応が返ってきた。「で、出たくない……」

短い言葉の中に震えと怯えが入り混じっている。やはりアンデッドに怯えているのかもしれない。

無理やり小屋に入るうにもドアに鍵が掛かっている。

「俺がおまえを守る」

芯の通った信頼のおける声だった。それが子供にも伝わったのか、内鍵の開く音がした。

小さな隙間から上目遣いでこちらを見つめる幼子の顔は憔悴しきっていた。幼い子供がここでどんな恐怖を味わっていたのかを考えると胸が痛む。

怯えながらも外に出ようとするケルピンをバンガードの大きな手が止めた。

「俺が良いと言うまで、鍵を閉めて中に入っている」

ケルピンの大きな瞳は、自分の背の高さほどの四つ足の獣を映し出していた。

凄まじい殺気の凝結。

四つ足の獣が群を成し、こちらを金色に光る眼で睨んでいる。キラールフの群だ。

群を成して行動するキラールフは知能が高く、頭脳プレイを用いて獲物を狩る。

息を合わせてキラールフが三匹の同時に襲い掛かってきた。バンガードが背負っていた大斧を振り回す。

当たれば大ダメージを与える大斧だが、敏速なキラールフはそれを易々と躲し、装甲に覆われてないバンガードの頭部に飛び掛かってくる。

バンガードは瞬時に地面を転がりながら敵の攻撃を避けた。

その身のこなしは重い鎧を着ているとは思えないが、全身装甲の重い鎧は重さが均等に分割されているために、熟練した者な

らば素早い身のこなしで動くことできるのだ。

敵の数は一匹ではない。避けた場所にキラールーフが襲い掛かる。

大斧が襲い掛かってきたキラールーフの腹を殴るように切断した。

断末魔をあげるキラールーフはすぐに事切れ、仲間のキラールーフが大斧を持つ手首に噛み付いてきた。

キラールーフを振り落とそうと腕を振っている最中に、残った一匹のキラールーフが鋭い犬歯を覗かせバンガードの画面に襲い掛かってきた。

バンガードはすぐさま大斧を捨て、キラールーフに噛まれていない腕を出して、顔面に襲い掛かってきたキラールーフに噛ませた。

両腕をキラールーフに噛みつかれ、武器をも失ったバンガードに、近くに潜んでいた四匹目のキラールーフが飛び掛かってきたのだ。

絶体絶命のピンチにバンガードは力押しで切り抜けようとした。

両腕に噛み付くキラールーフを二匹同時に振り回し、飛び掛かってきたキラールーフを挟むようにぶつけたのだ。

仲間同士でぶつけられたキラールーフたちは脳震盪を起こし、気絶をして地面の上で動かなくなった。

戦いを終えたバンガードは見張り塔の扉に近づいた。

閉めると命じた扉は少し開いており、そこからケルピンはこ

ちら側を覗いていた。

「もう心配ない。母親の元に行くぞ」

ケルピンは頷き扉を開けて外に出てこようとした。だが、その足が急に止まった。

背後に殺気を感じたバンガードが大斧を振るう。

ピュンと風を切った大斧は風と共に、四つ足の獣に傷を負わせた。

そこには筋骨隆々の黒犬いた。

野生 いや、この辺りで飼われていた猟犬に違いはない。この国で起きた争いの際、飼い主に見捨てられ野生化してしまったのだ。争いの被害者は人間だけでなく、動物達の中にも生まれるのだ。

弱った動かなくなつた黒犬に止めを刺そうとバンガードが大斧を振り上げる。

大斧を振り下ろそうとしたとき、その前に幼いケルピンが立ちはだかつたのだ。

「殺さないで！」

舌足らずの幼子の訴えにバンガードは躊躇し、大斧の先端を地面に降ろしてしまった。

地面から立ち上がった黒犬が背を向けて逃げていく。

笑みを浮かべたケルピンにバンガードは抱きつかれ、少し照れ臭そうにそっぽを向いた。ぶっきらぼうな態度も、子供の瞳にはお見通しなのだ。

大柄なバンガードは小柄なケルピンを肩に乗せて帰路を急い

だ。

母と兄弟たちの再会は近い。

残るは長女のアリッサだけだ。

事前に細かい場所を尋ねようにも、心労でクライストン夫人は倒れてしまった。一刻も早く母と兄弟を引き合わせなくてはならない。

礼拝堂は居館のほぼ中心部にあった。

すぐに礼拝堂を見つけることはできたが、長女アリッサの姿は見当たらない。

アンデッドに見つかってしまったては元も子もない。すぐに見つからない場所にいることは承知の上だ。

なかなか見つからない長女の姿に、エルザは次第に不安を覚えていた。

「クラウス様、ここにアリッサが本当にいたのでしょいか（もしかしたらすでにアンデッドに殺されてしまったのでは？）」

「クライストン夫人は礼拝堂だと確かに言い残した。礼拝堂と他の場所を間違えることはないだろう」

しかし、いくら経つてもアリッサを見つけることはできなかった。

積もる不安は拭えない。

ステンドグラスから差し込む七色の陽が、神像を荘厳に輝かせていたのも昔の事、外で振り続ける雨のため七色に光は失われ、今は廃墟と化して壁には大きな穴も穿たれていた。

エルザは聖アルテイエルの偶像を見上げ祈りを捧げた。

「(どうかアリッサが無事でいて、一刻も早く見つかるように)」

幸運なことにアンデッドの魔の手はまだ伸びていない。

廃墟とはいえ、聖なる礼拝堂はアンデッドと寄せ付けない力があるのかもしれない。

教壇やパイプオルガンの陰、戸棚や椅子の陰にもアリッサの姿はなく、泣き声も聴こえてこない。もしかしたら、ここにはないのではないかとという不安が積もっていくばかりだ。

クラウスの瞳にも曇りが浮かびはじめた。

「探してない場所は本当はないのか……？」

「他の場所に探索に参りますか？」

「いや、もう少しここで探索を続けよう」

今日はクラウスの一五歳の誕生日だった。本来ならば国で催されているはずの式典に出席しているはずだったが、替え玉を用意して式典に出席せずにこの地に赴いた。

まだクラウス魔導学院に籍を置くクラウスは学業と国務を両立させ、国務をおろそかにしていると文句を言われぬよう、全身全霊で一線に立つて活躍を見せている。

そんなクラウスが弱音を吐いたり、疲れた姿をエルザは見たことがない。

「今日はクラウス様のお誕生日だと言うのに、とんだことに巻き込まれてしまいましたね(今日くらいは心落ち着く時間を過ごして欲しかった)」

「とんだことなどではない。クライトン夫人を助けられたのは幸運だった」

確かに自分たちによってクライトン夫人の命は救われた。しかし、エルザは日ごろからクラウスの考え方に危機感を覚えていた。

「クラウス様は自分の身を危険にさらしても人を救おうといたしません。わたくしはそれが心配でなりません」

「わかっているさ。僕が死ねば国にどのような影響を及ぼすかくらいは。けれど僕は自分の命と他の命を同等と考えている」

「(そんなことは奇麗事だ)」

それをエルザは口に出すことはなかった。

動きを止めてしまっているエルザにクラウスが促す。

「アリッサの搜索を続けよう」

深く頷いたエルザはパイプオルガンの影を探した。

この礼拝動が使われていたころは美しい賛美歌を奏でていたに違いない。しかし、今は鍵盤が抜け落ち音もなりそうもない。鍵盤に触れてみたのは、ほんの気まぐれだったかもしれない。壊れていると思っていたパイプオルガンが短く音色を響かせたのだ。

そして、奇跡は起きた。

音色に驚いたのか、赤ん坊の泣き声がどこからか聴こえた。

泣き声のする床板に手を掛けるとすぐに外れた。なんと、そこには頑丈な作りの宝箱。そして、中から現れたのは幼い赤ん坊だった。

ついにアリッサを発見できたのだ。

見つけ出したアリッサをクラウドスが抱きかかえると、防波堤を壊したように大泣きされてしまった。慌ててエルザにアリッサを任せると、アリッサはエルザに抱かれて静かになった。

困惑しているクラウドスにエルザは微笑みかけた。

「クラウドス様はいつも眉間に皺を寄せています。そんな顔をしていたら子供に泣かれるのは当然でしょう」

「そんなに僕はいつも眉間に皺を寄せているかい？（そんなつもりはないんだが）」

「ええ、クラウドス様が眉間に皺を寄せていないのはルーファスと一緒にいるときくらいです」

「そうか」

もつと難しい顔をしてクラウドスは黙り込んでしまった。

エルザが持参していたミルクをアリッサに与えると、アリッサは無邪気に笑顔を浮かべてくれた。その笑顔を見た二人は顔を見合わせて微笑んだ。

「クラウドス様、この子を連れて早く宿に戻りましょう」

「そうだな、母親の喜ぶ顔を早く見たい」

アリッサをエルザに任せ、クラウドスは果敢にも先陣を切って礼拝堂に外に出る。途端に襲って来たアンデッドどもをなぎ払った。

「やはり外で待ち構えていたのか」

聖なる力が働いてアンデッドたちは礼拝堂に近づけず、礼拝堂の外でクラウドスたちが出てくるのを、息を潜めて狙っていた

のだろう。

エルザもアリッサを抱きかかえながら剣を抜いた。

アンデッドを切り裂くエルザの剣技。しかし、胸を切り落とされても、アンデッドは妄執に取り付かれ、なおもエルザたちに襲い掛かってくる。

アンデッドをそこまで駆り立てるものは何なのか？

そんなアンデッドたちの姿を見て、クラウスは居た堪れない気持ちになる。

「（この者たちも元は人間。戦乱の中で死してアンデッドと化したのだろう）」

死の呪いのよって、成仏できぬまま彷徨い続けるアンデッドたち。

しかし、もうこの者達は生者ではない。

無限の可能性を秘めた未来を持っている者は、エルザの胸に抱かれた幼いアリッサだ。

クラウスの剣がアンデッドを斬る。

輝き塵と化すアンデッドたちは成仏できるのだろうか？

せめて最期の時は苦しまずに……。

願いを込めてクラウスは剣を振るった。

そして、クラウスは見たのだ。

アンデッドが塵と化す刹那のとき、安らかな表情を浮かべていたのを。

気がつくのと、辺りからアンデッドたちの気配は消えていた。鞘に剣を収めたクラウスはまた眉間に皺を寄せて難しい表情

をしていた。

子供たちを全員救出し、宿で合流したクラウスたち。

クライストン夫人は嬉し涙を流しながら、何度何度もクラウスたちにお礼を言ってお立ち去った。

仕事を終えた後の一杯の酒を喉に流すオルガス。

「くう、今日の酒は極上だな」

隣ではバンガードが寡黙に酒を飲んでいる。

なんとも言えない充実感に浸る者たちの中、クラウスだけは難しい顔をしていた。

そんなクラウスにほろ酔いのエリーナが酒を勧める。

「クラウス様も難しい顔しないで一杯やりましょう」

「僕はまだ酒の飲める年じゃない」

酒を断るクラウスにエリーナは強引に酒をついで渡した。

「お忘れですか？ 今日にはクラウス様の一五歳の誕生日なのですよ」

ハツとしたようにクラウスは口を小さくあけた。

「そうか……忘れていた。一五歳か、酒の飲める年だな」

アステア王国では一五歳以上に飲酒が認められている。

地ビールを注がれたグラスを受け取ったクラウスは、それを一気に喉に流し込んだ。

そして、難しい顔で眉間に皺を寄せたのだった。

それを見た周りの者達がどっと笑い出す。

クラウスもそれに釣られて静かにはにかんだ。

君主がいつも笑顔でいられるように、エルザは忠誠を再確認して胸に誓ったのだった。

アイーダ海の白い悪魔

南アトラス大陸に隣接する南ノース洋は、今や武装船団ヴィングの縄張りとなっていた。

ヴィングとはイースランドを起源とする民族の総称で、主に今の時代はヴィング民族の“海賊”を指す言葉として用いられている。

聖歴八世紀 時代は第一次大海賊時代だったりする。

この時代有数の港町アディアは今日も賑わっていた。

商船や漁船の乗組員、ランバード海軍が酒場で昼間から酒を飲んでいた。

ランバードとは聖戦で活躍した七英雄の末裔が治める国であり、南アトラスの四強に数えられる国である。つまり、なんかスッゴイ国なのだ。

ランバード、ヴィング、シオウル、メミスが四強に数えられる。

この中で国なのがランバードとメミス。

ヴィングたちは武装船団の総称であり、団結性があるわけではない。

シオウル帝国は二五〇年ほど前に滅びたハズの国なのだが、数年前から不死焯帝を名乗る者によって復興した死者の国であり、一般的な国としての機能は果たしていない。

メミスは中立を保っているため、残りの三戦力が大陸で絶えず戦乱を繰り返して、交易港であるアディアはその縮図だ。

酒場に熊のような図体をした男たちが入ってきた。酒を飲んでいた海軍たちの目つきがかわる。

巨大な斧などの武器を携帯し、毛皮の服を着た野蛮な香りする男たち。身体が臭い。

海軍の隊員たちが立ち上がって、野蛮な男たちの前に立ちふさがった。

「おまえらのような者が来るような場所じゃない（風貌からしてヴィーリングかもしれないな。てゆか、臭いな）」

海軍の隊員のひとりが言った。

野蛮な男たちは顔を見合わせて、黄色い歯を見せながら笑いあつた。

そして、巨大な拳を高く振り上げて、隊員の顔面をパンチ！

殴り飛ばされた隊員はドーン！

それを合図にドンチャン騒ぎがはじまってしまった。

酒瓶が宙を飛び交い、鈍器に使われる木のイス、青ざめる店主の顔。

店内が荒れる中、ただひとり静かに酒を飲み続け客がいた。白いフード付きのローブを頭から被り、傍らの席にはこの客の私物なのか、アイパッチをしたピンクのウサギのぬいぐるみが置かれている。

ただのぬいぐるみだと思っていたウサギが口を開いた。

「海軍がヴィーキングに押されてるにゃー（海軍も人手不足で弱
つちいのしかないにゃ）」

ウサギなのに『にゃー』なのは制作者の仕様だ。

かまわず白いフードの人物は酒を飲み続けていた。

が、しかし、どこからともなく飛んできたワインの瓶が……
白いフードにクリティカルヒット！

ガッン！

と、一発側頭部を殴られ、フードの下のこめかみに青筋が浮
いた。

真横にいたウサギがフードの中を覗いて青ざめた。

「お、怒っちゃ……ここで暴れたらダメだにゃー！」

白影がすーっと席を立った。

北風が店内に吹き、床に白い霜が走った。

うつむくフードの奥から低い女の声が響く。

「……てめえら」

騒がしい店内だったが、その声はなぜかこの場にいた全員の
耳に響いた。

白いフードが取られ、長く美しい金髪が現れた。そして、金
髪よりも輝いている白く美しい女の顔。

金髪女に向かってウサギが叫んだ。

「この町に出入りできなくなるにゃ、やめるにゃカーシャ！」

だが、その言葉も金髪女の耳には届かず、金髪女ことカーシ
ヤは怒号を飛ばした。

「アタイに瓶を当てた奴はどのポケじゃ！ 名乗りでないなら

この場にいる全員連帯責任で血祭りにあげたるわ！」

乱暴な言葉遣いに驚いたというより、その満ちあふれる殺気で辺りは凍り付いた。

精神的な寒さではなく、明らかな気温低下。

カーシャの切れ長の瞳が次々と男たちが見て回った。

逆境と多くの戦乱を生き延びてきたヴィーングたちは、相手が若い娘だと知って鼻で笑った。

「小娘がつ、俺らにケンカを売ってただで済むと思ってるのか？（なかなかいい女だ、可愛がつてやるとするか）」

これにたいしてピンクのウサギがボソツと呟く。

「カーシャはただの若作りだにゃ（何千年生きてるのかわからないババアだにゃ）」

ギロつとカーシャはウサギを睨み、そのままウサギの首を握って放り投げた。

投げられたウサギはヴィーングに叩かれ、床に激突。痙攣したまま動かなくなった。

さよならウサギさん！

勇敢にもカーシャはヴィーングに向かって歩き、途中なんか汚れたぬいぐるみを踏んづけたような気がするが、気にしない

長く伸びたヒゲの囲まれた口を舐め、ヴィーングはカーシャの胸元を舐めるように見ている。

「牛みてえな乳してやがるな。なんなら俺がミルクを吸い出してやろうか？」

と、言つてヴィーングたちは一斉に笑い出した。

そして、ローブの下からでもわかるカーシャの爆乳に男が触れようとした瞬間、骨を砕く音がして男は手首を捻りあげられていた。

「アタイに気安く触ろうとするんじゃないよ！」

カーシャは相手の手首を砕きながら、止めと言わんばかりに膝蹴りを放った。

膝は男の大事なところを抉るように潰し、男は口からカニのみたいに泡を吐いて失神した。

ぎよつと眼を剥いたのはヴィーングたちだけではない。店内にいた男たち全員が辛そうな顔をしながら股間を押さえていた。

カーシャは冷笑を浮かべて男たちを眺めた。

「次はどいつのタマを潰してやるうか？」

挑発的な態度にヴィーングたちの血が煮えたぎり、野獣と化したヴィーングたちが束になってカーシャに襲いかかってきた。

北風が吹いた。

カーシャに襲いかかろうとしていたヴィーングたちが吹っ飛んだ。何が起きたのか、それを理解するのに数秒を要した。

ホウキを構えるカーシャの姿。その姿はカーシャであつて、先ほどのカーシャではなかつた。

白銀の長い髪をなびかせ、魔導を帯びた蒼い瞳。白い肌はより白く輝いていた。

そのカーシャの姿を見て、誰かが畏怖を込めながら呟く。

「“アイーダ海の白い悪魔”」

その通り名を近海の町々で知らぬ者はいない。

海賊の船を次々と沈める白い悪魔の伝説。

カーシヤは冷笑を浮かべた。

「みんな凍ってしまえばいいわ」

それが男たちの耳にした最期の言葉だった。

アディアの酒場にいた客が、全員凍りづけにされて見つかったから数十分後、カーシヤはアイーダ海の上空をホウキに乗って飛行していた。

「店丸ごと凍らすことなかったにゃー（手加減を知らないにゃ）」

その声はカーシヤの首の後ろ辺りからした。フードまるでポケットのようにして、その中にあのウサギが入っていた。

「使い魔のクセして、アタイに意見する気？」

「滅相もないにゃ、おいらはカーシヤの従順な下僕だにゃ」

このウサギの正体はカーシヤの作り出した人工魔導生物であり、名前はマールブル・チヨコ・レイト三世という。ちなみに一世と二世はいない。

カーシヤは銀色の髪をなびかせ、なにかを探すように上空を旋回していた。

「いないわね」

「広い海で特定の船を見つけるなんて難しいにゃ」

「うっさい、連帯責任を負わせるまで地獄の果てまで追撃したるわ」

実は酒場からただひとり凍りづけにされずに逃亡したヴィングがいたのだ。そいつを追ってカーシヤは海に出た。

ここまでカーシヤが追撃に執念を燃やす理由は、金髪女の正体が「アイーダ海の白い悪魔」だと世間に広まると、金髪の姿で町を出入りできなくなる理由があるからだ。

という理由より、ぶつちやけ個人的な恨みだと思う。

カーシヤの蒼眼がキラリーンと輝いた。その瞳に映ったのはガレー船の帆だった。帆に描かれた図柄は、酒場にいたヴィングが腕に入れていた刺青と同じ。

「間違いないわ」

船のサイズはこの時代にしては平均的、十数人乗りの小型船で、カヌーを大きくしたような形をしている。

ホウキを急降下させて、カーシヤは船の真横に併走した。

銀髪のカーシヤを見たヴィングたちが凍り付く。ひと目で

「アイーダ海の白い悪魔

だと知れたのだ。

すぐにヴィングたちは武器を構えた。だが、まだ仕掛けてこない。

しばらくして、ぐうんと人相の悪い船長が顔をひとつ前に出した。

「アイーダ海の白い悪魔」だな？ おまえさんがこの船になるのようだ？」

「そこに隠れてる男をまずアタイに渡しな」

酒場から逃げた男は人陰に隠れていたが、すぐにカーシヤと

目が合ってしまった。

船長はうんとは言わなかった。

「おれたちや、同士を売るようなマネは絶対にしねえ」

「あつそ、なら連帯責任は免れないわよ……覚悟はいい？」

カーシャの周りに集まり出す蒼いマナフレア。魔導の力が発動されようとしていた。

航海を続けていた船が突然止まった。

強い北風に煽られ帆はなびいているにも関わらず、なぜか船が止まってしまったのだ。

ヴィーングのひとりが身を乗り出して船の底を見ると、なんと海が凍り付いてしまっていた。

殺らなきゃ殺られる。そんな空気が張り詰め、血走った眼でヴィーングたちがカーシャに矢を放った。

一瞬にして凍り付く船板。ヴィーングたちの足が止まった。いや、止められた。

凍り付いたのは船板だけではない。ヴィーングたちの足までもが凍り付き、船板に張り付いてしまったのだ。

カーシャは冷笑を浮かべる。

「何日くらいで死ねるかしら？」

足を凍らされ、その場から動くことも逃げることもできない。広い海の上、ただ死が訪れるの待つのみ。

自由に動く上半身を動かして、ヴィーングは斧を投げつけてきた。

カーシャのその斧を取るでもなく、躲すでもなく、ただ手の

ひら突き出した。

すると、斧はカーシャに当たる寸前、蒼く凍り付いて粉々に砕け散ってしまった。

「まだアタイに牙を向けるなんて良い度胸してるじゃない？」
微笑を浮かべたカーシャは船に降り、持っていたホウキを風車のように回した。

強い北風が吹き、空気の中の水分が氷結する。

ヴィーングたちは氷の中に閉じこめられ、恐怖に歪める顔を冷凍保存することにしたってしまった。

満足そうにうなづくカーシャは、積んであった積み荷を物色することにした。

木箱がいくつか並べられ、ひとつ開けてみるとワインが詰め込まれていた。

他の木箱にはチーズなどの食品の他、レッドハーブ、ブルーハーブ、薬草などの類もあった。

「あまり金目の物はなさそうだから、薬草を少しもらっておこうかしらね。マーちゃん、使えそうな薬草を袋に詰めておいて」

「人使いが荒いにや」

「アンタ人じゃないでしょ」

「言葉のあやだにや」

マーブルは小さな身体を一生懸命動かしながら、大きな木箱を開けて中の薬草を集めはじめた。

カーシャは最後に残っていた木箱を開けることにした。これ

には頑丈な南京錠がかけられていた。

白いカーシヤの手が南京錠に触れると、一瞬して南京錠は凍り砕け散った。

木箱のフタを開けたカーシヤは眼を丸くして、凍ったように身動きを止めてしまった。

なんと木箱の中には子供がいたのだ。それも手足を縛られ、口にも布をかまされている。身なりの良いドレスを着たブロンドの少女だった。

鋭い目つきで少女はカーシヤを睨んでいる。

数秒カーシヤは動きを止めた後、見なかつたことにした。

子供をめんどくさいから好きじゃない。

ボタンと木箱のフタを閉めてマーブルを見る。

「そろそろ行くわよ」

「その箱の中身はなんだつたにや？」

「別になにも入ってなかつたわよ」

と、カーシヤがウソをついた瞬間、木箱がガタガタと大きく揺れた。

なまぬる〜い眼でマーブルはカーシヤを見ている。

「本当はなにが入ってるにや？」

「なにも入ってないわよ」

サラッと白々しいウソ。

当然、マーブルはそんなウソを信じるハズがなかった。

マーブルは自ら木箱を開けた中身を見た。やっぱり中には縛られた少女が入っていた。

「にや、子供が入ってるにや！」

驚くマーブルにたいしてカーシヤは惚けとおす。

「子供？ なにそれ、どこにいるの？」

「ついに老眼が……ぐえっ！」

マーブルの身体が鋭く蹴り飛ばされた。もちろん蹴っ飛ばしたのはカーシヤ。

帆に激突して、そのまま床にも激突したマーブルは、そのまま身動きひとつしなくなつた。

さよならマーブル！

そして、すぐに蘇るマーブル！

やっぱりカーシヤの下僕だけあつて、いろいろと打たれ強いのだ。

マーブルはヨロヨロしながら、再び身を乗り出して木箱の中を覗いた。やっぱり少女は入つたままだ。

「やっぱり子供は入ってるにや……にやっ!？」

奇声をあげるマーブル。

何者かに背中を押されて木箱に押し込まれ、フタをバタンと閉められた。何者かって回りくどい言い方をしているが、もちろんカーシヤだ。

フタの閉まつた木箱がガタゴト揺れて、中では壮絶な何かが続り上げられているようだ。そして、聞こえてくるマーブルの声。

「人質に取られたにや、助けてにやーっ！」

どうやらマーブルは人質に取られたらしい。

しかし、カーシャはサラッと。

「そんなホコリ臭い人形ならくれてやるわ。さよならお嬢ちゃん」

「ヒドイにゃ、おいらがどうなってもいいのかにゃ！」

「アンタに命を吹き込んであげたのはアタイよ。その命、どう使おうとアタイの勝手でしょ」

「ペットは責任を持って飼わなきゃいけないにゃ！！」

激しく木箱が揺れた。

「俺を自由にくれられたら宝石でも何でもくれてやる！」

その声はマーブルでもカーシャでもなかった。

となると……？

なにか心変わりでもあったのか、カーシャは木箱のフタを開けた。

口を縛っていた布が外れ、少女の瞳はまっすぐカーシャを見据えていた。

「早く俺を自由にしてくれ！」

綺麗な顔をした少女が俺 オカマかつ！

カーシャは不適に微笑んだ。

「アンタに興味がわいたわ」

タマがあるかないか!?

そこではなかった。

「アンタ何者なの？」

「言いたくない」

少女はそっぽを向いて口を閉ざしてしまった。

そっちがその手ならカーシヤはこっちの手を使うまでだ。

「あつそ、さよならお嬢ちゃん」

背を向けたカーシヤを見て少女は焦る。

「待て、縄をほどいてくれたら教える！」

「イヤよ、そっちが身元を明かすのが先よ」

「……縄を解くのが先だ」

「そうだ、この船のヴィーリングどもはみんな動けないから。運良く他の船に発見されたら幸運だわね」

そう言つて再び背を向けたカーシヤを見て少女が折れた。

「……皇女だ」

「はっ？」

「ランバード王国の第一皇女フェリシア・ランバードだ」

「……おもしろそうな話になつて来たじゃない？」

眼をキラキラに輝かせるカーシヤ。

南アトラス大陸の大国ランバードの第一皇女が、なんとヴィーリングの武装船の中で拘束されていたのだ。

大きな事件の臭いがプンプンだった。

二人乗り　正確には二人と一体を乗せたホウキはアイダ海を南東に進んでいた。

「で、なんでランバードの皇女様がヴィーリングの船になんて乗つてたわけ？」

前を見ながらカーシヤが訪ねると、フェリシアはめんどくさそうに答えた。

「あの状況を見ればわかるだろ、さらわれたに決まってるだろ」

まるで男みたいな口の利き方だ。顔を見なければ少し声の高い少年みたいだ。

たしかに着ているドレスは一級品で、イヤリングやネックレスなどの装飾品も高価そうではある。

だが、やっぱり信じ切れない部分があるのも事実。

「マジでランバードの皇女なわけ？」

「本当なんだからしょうがないだろ」

フェリシアはそっぽを向いて遠くの海を眺めた。

地平線に続く青い海を見るフェリシアの目に入るピンクの物体。気になってフェリシアは訊いた。

「アレ、あのままでいいのか？」

「アレってなによ？」

「吊されてるお前の使い魔だよ」

「別に死にはしないからいいのよ、別に」

ホウキから伸びたヒモに縛り付けられたマーブルの姿。風に煽られてブンブン振られていた。そんなじゃそこの絶叫マシンより怖い。

けど平気、だってもう気を失ってるもん

カーシャは話を戻す。

「さらわれたって言ったけど、なんでさらわれちゃったわけ？」

「身代金目当てか政治目的だろ」

「そじゃなくて、アンタ皇女様なんでしょ。なんで簡単にさらわれたのよ？」

「……周りに護衛がいなかったから」

少し回りくどい言い方だった。

「護衛がいなかったってどうしてよ？」

「俺ひとりだったから」

「だからなんでひとりだったのよ？」

「それは……式典を抜け出したから」

「自業自得ね」

言葉遣いや式典を抜け出す行動。だいぶやんちゃん皇女様らしい。

徐々に近づいてくる陸地を見ながらカーシャが言う。

「ランバード領はまでは送ってあげるわ。ちゃんと城についたらお礼しなさいよ」

「どんな礼が欲しいんだ？」

「金とか宝石はいらないわね。ただアンタの親父に言つといて、
“アイーダ海の白い悪魔”はそんな噂ほどのワルじゃないつて」

「そうだな、お前が本当に“アイーダ海の白い悪魔”なら、そんな悪い奴じゃないかもしれない」

最初は見て見ぬフリをしたが、結局は縄を解いて送り届けてくれようとしている。

カーシャはどつとため息を漏らした。

「噂なんてものはあることないこと言われるもんなのよ。たし

かに、たしかにね、ちょっと町で暴れたこともあるし、間違つて商船やランバード海軍の船を沈めちゃったことは認める。でも、あれって事故だし、アタイ基本的にヴィーキングの船しか狙わないし。なのに最近じゃいるんな奴らに目の敵にされて、ランバード海軍も追ってくるし、サイテーよね」

人智を超える力を持つカーシャ。ちょっとぴり頭に血が昇りやすく、ちょっとぴり暴れただけで甚大な被害が出る。あくまで不可抗力ですよ　というカーシャの言い訳。

なんとなくホウキを運転していたら、なんとなく港町アディアまで来てしまった。ちょっと前にこの町で騒ぎを起こしたばかりだ。

来てしまったものは仕方ないし、さっさと皇女様をどうにかしたい気持ちもあったので、カーシャはしかたなくアディアの港に降り立った。

「じゃ、ここでお別ねね、はいサヨナラ」

希薄に手を振るカーシャ。

フェリシアは不満そうだった。

「ここで分かれてまた俺がさらわれたらどうするんだ？」

「……めんどくさいガキ」

めんどくさいと愚痴を吐きながらも、結局カーシャはフェリシアをテキトーなところまで連れて行くことにした。

ちなみにマールブルは未だに気絶中で、ヒモでズルズル引きずられてる。

しばらくして軽鎧を着たランバード兵の姿を発見した。

向こうもコッチに気づいたようだ。

「姫様がいたぞ！」

「“アイーダ海の白い悪魔”と一緒にだ！」

「姫様を救え！」

次々と声上がり、カーシャは『しまった！』という表情をした。

「……銀髪のままだった」

フェリシアのことですっかり“覚醒モード”を解くのを忘れていたのだ。

兵士たちが剣や槍を構え駆け寄ってきた。

誤解を解くためにここはフェリシアに間に入ってもらおうしか

……。

「やっぱり帰りたくない」

なんて抜かしやがったフェリシア。

しかもフェリシア逆走！

すぐに追いかけるカーシャ。

この構図を端から見ると、逃げる姫君を悪魔カーシャが追う構図。

実際は家に帰りたくない不良少女が兵士から脱げようとしているのだが、なんかもう誤解されていた。

「姫様が白い悪魔に、早く助ける！」

こうなったら奥の手を使うしかない。

カーシャはホウキにまたがって逃走！

逃げるが勝ち。

困ったときはとにかく逃げろ！

空に浮いたホウキの柄をフェリシアが掴んだ。

「俺も連れて行け！」

「あふおか、そんなことされたまた誤解されるじゃないのよ！」

宙ぶらりんのフェリシアを蹴落とそうとするカーシャ。その姿を見ている兵士たち。ここでフェリシアを蹴落としたら、絶対に悪役にされる。カーシャは自制した。

「いいわ、さっさと乗りなさい！」

カーシャが伸ばした手をフェリシアが掴み、そのまま持ち上げられるようにホウキに乗せられた。

地上では兵士たちが喚いている。

「皇女がさらわれた！」

という勘違いをされていた。

カーシャは重たい頭を支えるように、おでこにペタンと手のひらを置いた。

「やってらんないわ」

すっかり皇女誘拐の実行犯にされてしまったカーシャの運命はいかに！

そんな感じの展開で、カーシャは再び海に出た。

船があっても陸地に比べて追ってが来づらい。

「どーすんのよ？」

低い声でカーシャが尋ねた。

「だって帰りたくなかったんだ、仕方ないだろ」

すねたガキの表情を見せるフェリシア。

カーシヤは唇を噛んだ。

「やっぱアンタなんか助けるんじゃない（でも、なかなかおもしろい展開よね、うふっ）」

言葉とは裏腹にカーシヤは含み笑いをしていた。後悔しつつも、この展開に心を躍らせていたりもするのだ。

カーシヤは気持ちを切り替えることにした。

「ならいいわ、帰んなきゃいいんじゃない？」

「本当に帰らなくてもいいのか？」

フェリシアは目を輝かせた。

「別にアンタの自由でしょ。ただ、これからどうすんのよ」

「まずはこの服を着替えたい。こんなヒラヒラしたスカートなんか穿いてられるか（股がスースーして気持ち悪い）」

「ランバード王家はアンタにどんな教育してんだか」

「父上の背中ばかり見て育ったからな。物心つく前から父上のようにになりたいと思ってた」

もとより身体の弱かったフェリシアの母は、難産でフェリシアを生み、そのまま命を落としたという。

母を知らぬフェリシアの肉親は父だけだった。教育係はいたが、それでも父の影響を強く受けたフェリシアは、まるで男児のように育った。

「にゃーっ！（こどこどこだにゃ!?!）」

突然、マールブルが悲鳴をあげた。

マーブルはまだホウキから伸びたヒモに縛られたままだった。「早くおいらを助けてくれにや！」

悲痛な訴えにカーシャはシカト。

フェリシアがヒモを引き上げてあげようとしたのだが、その手は途中で止まってひゆるひゆるうっ指の間をヒモが抜けてしまった。

「うっ！」

ヒモがガクンと伸びきった瞬間にマーブルはダメージを受けた。

そんなマーブルは放置でフェリシアは海上に浮かぶ小型のガレー船を見ていた。

「どこの船だろう？」

その声に反応してカーシャもその船を見た。

「ヴィーングたちね。あいつらの服をもらう？（臭そうだけど）」

「臭そうだからイヤだ」

キツパリ断った。

するとカーシャが手にマナを溜めはじめた。

「なにをする気？」

フェリシアが訊くとカーシャはニヤリと笑った。

「こうするのよ」

ホウキのスピードが急速に上がり、振り落とされないようにフェリシアはカーシャの腰に腕を絡めた。

そして、ガレー船とホウキとの距離が一〇メートルを切った

とき、カーシャの手から氷の塊が放たれた。

高速で飛ぶ凍氷の塊はその大きさを拡大していき、船の目と鼻の先に到達したときには、その大きさを三メートルほどになつていった。

氷の塊の直撃を受けた船は折れるようにVの字に曲がり、大きな水しぶきを上げながら海に沈んだ。

「よっしゃー！」

満足そうにガッツポーズをするカーシャ。

真後ろにいるフェリシアは目を剥いていた。

「呪文も唱えないであんな魔導を使えるなんて……（悪魔の所業だ）」

魔導の基礎となつたのがライラと呼ばれる別名“神の詩”である。その名の通り、詩を詠むことによつて力を発動するタイプの魔導であり、詠めば詠むほど強くなると言う特性を持つ。

しかし、呪文の詠唱に時間がかかるなどの理由から、簡略化されたライラとアイラが主流となり、ライラは古代魔導としてその使い手の数が減少している。

レイラの発動には呪文を唱えることが必要であり、つまり呪文の名前を言葉に乗せることにより発動する。

そして、レイラの時代から存在し、今でも一般的に使われている魔導の中には、言葉を一言も発せずに使えるものが存在する。ランプに火を付けるなどの作業などに向いているが、威力はとて小きなものなので戦いには不向きとされている。

ゲームのノリで船を沈めたカーシャは、とつくに船のことを

忘れてホウキを走らせた。

ちなみにマーブルは自力でヒモを登って、フェリシアの背中を掴んでちょこんとホウキに座っている。

ホウキはどこに行くでもなく走り、沿岸の崖を大きく曲がった。

カーシャが嬉しそうに微笑む。

「巨大な船はっけーん」

崖を陰にして隠れていた巨大な船。戦争に使われるような巨大なガレー船で、おそらく乗員は二〇〇名以上。

フェリシアが尋ねる。

「なぜあんな場所に隠れているんだ？」

隠れる理由がある。隠れる必要がある。隠れるということは、敵対するモノがいるということだ。

カーシャの瞳がなにかを発見した。

「魔弾砲を積んでるわね。これで商船じゃないってことははっきりしたわね」

戦争において主戦力となる魔導士。古くから魔導士を駒にした戦いは、遠距離戦が主流で、その戦力を魔導の使いぬ者も使うことができないか、その研究の中で開発されたのが魔弾砲である。

魔弾砲には天然のMana結晶が埋め込まれ、充填したManaエネルギーを放出する。人間が意識的に操っているのではないため、エネルギーの充填は自然に任せなければならない。そのため、いざというときに撃てないというデメリットも抱えている。

さらにカーシャは巨大船の観察を続けた。

「どうやらヴィーングのようね」

「よく見えるな」

フェリシアは目を細めるが、乗組員は米粒のようにしか見えない。

相手に気づかれないようになり遠くの空から監視している。向こうからこちらは空を飛ぶ鳥程度にしか見えないはずだ。

巨大な船、魔弾砲、ヴィーング。その点が線で結ばれた先にあるもの。

「あの船でどこに攻める気かしら？」

大きな戦乱を予感してカーシャの血が騒ぐ。

ヴィーングと敵対するのはランバードとシオウル。

フェリシアは少女とは思えない大人びた重い表情をした。

「ランバード領に攻める気なら、どうにか食い止めなきゃいけない」

「食い止めるってアンタになにができるの？」

「この事態を父上に知らせるのが先決だ」

「どうやって？」

「どうやってって……」

「アタイはイヤよ。アンタを送り届ける気はまったくないからさつきだってなんか勘違いされたんだから」

こんな場所で独りにされてもフェリシアには何もできない。

頼みの綱はカーシャだけだった。

「頼む、送り届けてくれるだけでいいんだ。もしも戦いがはじ

まっってしまったら、また多くの人が傷つくことになるんだ」

「別に他人がどうなるうとアタイには関係ないわ」

「……わかった」

フェリシアはうつむき、言葉を続けた。

「あの船に降ろしてくれるだけでいい、俺ひとりで戦う」

「あはは、イイ根性してるわね（そーゆーの好きよ）。でも、武器も持たないでどうやって戦う気？」

「武器は奴らから奪えばいい」

澄んだ瞳でフェリシアはカーシャを見つめていた。心の強さが瞳の奥に見える。

マーブルが口を挟む。

「助けてあげればいいにゃー。カーシャだって本当は戦いたくて仕方ないにゃ？」

カーシャはニヤリと笑った。

「誰が戦わないって言った？ 送り届けるのはイヤだと言っただけよ。ヴィーリング狩りはアタイのライフワークなもの」

その言葉を聞いてフェリシアは目を輝かせた。

「ありがとう、心から礼を言う」

「別に誰かのために戦うわけじゃないわ。ただの趣味よ、趣味」

しかし、二人だけで巨大な船と立ち向かえるのか？

「おいらもがんばるにゃー！」

二人と一匹だった。

巨大船の前に回り込み、相手側もカーシャたちの姿に気づいて甲板に出てきた。

ヴィーングたちを前にしてカーシャは言葉を風に寄せた。その言葉はまるで拡声器を使ったように響く。

「今からその船はアタイのもんよ、さっさと武器を捨てて降伏なさい！」

いきなりの宣戦布告だった。

ヴィーングたちがざわめきたち、声がいくつも上がった。

「“アイーダ海の白い魔女”だ！」

その声を合図にヴィーングたちは戦闘態勢を整えた。

積み重ねていた全ての魔弾砲の照準がカーシャたちに向けられる。到底避けきれぬ数ではなかった。

だが、その程度のことでは臆しては“悪魔”などと呼ばれるハズもない。

「魔弾砲ごときでアタイに敵うと思ってるの？」

その吐息だけで船を沈めるとまで云われる“アイーダ海の白い悪魔”。

生きた伝説をフェリシアは目の当たりにすることになった。

魔弾砲から高エネルギーは発射され、一直線にカーシャたちに向かってきた。

突き出されたカーシャの手のひらに蒼いマナフレアが集まる。

巨大なエネルギーがカーシャたちを呑み込もうとしていた。

猛烈な風が吹き、銀髪がなびき、氷の結晶が大気に舞う。

魔弾砲を吸収するカーシャの手のひら、次の瞬間！

「アイシングミスト！」

ダイアモンドダスト状の氷の結晶が、烈風に乗って巨大な船を呑み込んだ。

吸収した魔弾砲のエネルギーを増幅させて撃ち放ったのだ。アイシングミストは甲板にいたヴィーングたちを全員凍りづけにしてしまった。

その威力を目の当たりにしてフェリシアは息を呑んだ。

「この力があればたった独りで国を滅ぼすことも……」
「ア
ーダ海の白い悪魔……貴女はいつたい何者なんだ？」

その問いにカーシャは不気味に微笑むだけで答えなかった。代わりに答えたのはマーブルだった。

「何千年も生きてる婆さんだにゃ」

その言葉を聞いてカーシャの目がキラーン！

「あぁん、なんつった？ アタイがババアだつて？ くだばりやがれ欠陥魔導生物がっ！」

カーシャはマーブルの首根っこを掴んで、そのまま全力で投球！

この日、マーブルは夜空のお星様になったのでした。

さよならマーブル！

マーブルがぶっ飛び、代わりに魔弾砲がぶっ飛んできた。ついに全勢力仕掛けてきたヴィーング。

すべての魔弾砲がいつせいにカーシャに向けて撃たれた。

カーシャはホウキを走らせた。

魔弾の雨を躲しつつ、カーシャはそのマナエネルギーを吸収

していた。

魔導を放つために必要なマナを供給する方法は、自らのエネルギーを使うか、自然などの他からエネルギーを借りるか、カーシャは強大な魔弾砲のエネルギーを我がものにしていた。

カーシャは船の先端に降り立った。この場所に立っていれば魔弾砲を使うこともできない。

「この船は壊さないであげる。だってアタイのもんだから」
ホウキを構えるカーシャ。

船底から次々から出てきたヴィーングたちが武器を構える。

カーシャたちの背中には海が広がっている。目の前には大勢のヴィーングども。まるで追い詰められたようだ。

しかし、カーシャの顔に恐れも焦りもない。

巨大な船を沈めることなどカーシャにとって造作もないことだった。けれど、目的は船の制圧。

カーシャは肉弾戦を仕掛けた。

大剣や大斧で向かってくる敵にカーシャはホウキ一本で受けて立つ。

重く鋭い刃が振り下ろされる。それを受け止めたのは見た目にはただの木の棒だった。

剣を受け止められたヴィーングは驚きを隠せない。たがか細い木の棒で剣を受け止められるはずがない。

カーシャは笑う。

「ただのホウキじゃないのよ。この世でもっとも硬度が高く、魔導にも優れたウーラティアに生える樹齢一万年以上の大木か

ら作ったものなの」

カーシャが力を込めると、剣が折れて刃が宙に飛んだ。ホウキを武器にして次々とヴィーングたちを倒していくカーシャ。その戦闘力は魔導だけでなく、肉弾戦にも優れていたのだ。

気絶させられて海に投げ込まれるヴィーングたち。

ヴィーングの束を相手にするカーシャの目に映るフェリシアの姿。ヴィーングたちがフェリシアに襲いかかるうとしていた。「逃げるフェリシア！」

カーシャの心配は無用だった。

少女とは思えない俊敏な動きでフェリシアは敵の攻撃を躲し、殴り倒した男から剣を奪って構えた。

剣を持ったフェリシアは実に生き生きしていた。

華麗な剣の舞で次々と大の男を倒していく。

カーシャはそのフェリシアの姿を見ながら思い出していた。

「(ランバードは剣術が優れていたんだったわ)」

聖戦で七英雄のひとりとして戦ったフェリシアの先祖は、聖剣を振るい大魔王と戦った。それ以来、ランバードは剣術を主戦力に置いて技術を磨き、魔導隊にも劣らない騎士団を保有する剣術の国として知られるようになった。

いつの間にかフェリシアは独りでヴィーングの相手をしていった。

もう手を貸すこともないと、カーシャは船の縁に寄りかかってワインを瓶のまま飲んでいった。

「女しておくにはもつたいたい剣の腕。さすがは七英雄の末裔つてとこね」

一気に飲み干した空き瓶をカーシャは勢いよく投げた。

飛んでいった瓶はフェリシアの背後に迫っていた男の頭部にヒットして、そのまま男は気を失って倒れてしまった。

礼を言うようにフェリシアはカーシャに向かって微笑んだ。

微笑まれたカーシャは『そんなんじゃないわよ』つて感じてそつばを向いた。

カーシャのアイシングミストで倒した敵と、船に降りてから倒した敵、もうほとんどのヴィーングがたった二人によって倒されていた。

そして、ついにヴィーングの親玉が姿を見せた。

フェリシアの三倍はありそうな巨大な影。超巨大な斧を持って襲いかかってきた。

そんな光景を他人事のように観戦するカーシャ。二本目のワインを開けていた。

カーシャは横にいたずぶ濡れの人形に訊いた。

「アタイはフェリシアが勝つ方に金貨十枚賭けるけど、アタタいくら賭ける？」

「賭なんかしないで助けてあげるにやー」

そこに立っていたのは海の底から生還したマーブルだった。海水吸って塩味になっている。

カーシャは三本目のワインを開けた。

「大丈夫よ、あの子強いもの」

フェリシアの実力は山積みになされたヴィーングを見ればわかる。

超巨大な斧の攻撃を剣で受けることは難しいだろう。優れた剣術を持っていても、少女のフェリシアには筋力の限界がある。フェリシアの武器は軽やかな瞬発力。

床板を蹴り上げフェリシアは剣を振り上げた。

斧の刃がフェリシアの胸をかすめた。

だが、フェリシアのほうが早い。

刃が振り下ろされ、巨大な胸板が血を噴いた。

攻撃の手を休めずにフェリシアは切っ先を敵の心臓に突き刺した。

巨大な身体が音を立てて倒れた。

フェリシアの持つ剣は肉から引き抜かれ、鮮血を滴らせていた。

カーシャの蒼眼は立ちつくしているフェリシアだけを映していた。

「……少女が血みどろの戦いをするなんてイヤな時代だわ」

それが「アイーダ海の白い悪魔」の発した言葉なのか？

カーシャは多くの歴史を見てきた。時代は流れ、世界の中心は変わっても、争いのない時代はなかった。いつの世も血を血で洗い流す戦いが繰り返されている。

四本目の空き瓶をカーシャは投げつけた。それに当たって倒れるヴィーング。親玉を倒してもまだヴィーングは沸いて出る。ヴィーングは船にいるだけではなかった。近くのアジトから、

続々とヴィーングが船に乗り込んでくる。

フェリシアだけに任せていたら日が暮れる。再びカーシャが戦闘態勢に入ろうと動いたとき、頭上から矢が降ってきた。

すぐにカーシャは崖を見上げた。

降り注ぐ矢の雨。それはカーシャたちを狙ったものではなかった。

ヴィーングたちが次々と矢に倒れていく。

「新手？」

呟くカーシャ。

崖の上から大きな声が聞こえる。

「その船は俺たちカーラック武装船団が貰う！」

新手のヴィーングたちだった。

どこに隠れていたのか、新手のヴィーングたちが次々と現れ、そこら中で戦いがはじまってしまった。

カーシャはヴィーングをホウキで殴り飛ばしながら、フェリ

シアのもとに駆け寄った。

「なんかめんどくさいことになったわね」

「敵の数が増えただけだ」

フェリシアは淡々と言った。

情勢はカーラック武装船団が優勢。制圧は時間の問題だろう。

カーラック武装船団のヴィーングは船の上に乗って攻め込んできていた。

立派な角の生えた兜かかぶったヴィーングがカーシャたちの前に立った。その目はカーシャよりもフェリシアを見ている。

「まさかこんなところでランバードの皇女に会えるとは！」

「俺がランバードの皇女だつてよくわかったな」

「お前を誘拐する計画があつたんだが、どうやら失敗したらしくつてな。ここで会えたのは幸運だつたぜ」

「まさか……あいつらの仲間か？」

フェリシアは自分を誘拐したヴィーングたちのことを思い出していた。

話を聞いていたカーシャは笑っていた。

「……連帯責任じゃボケども」

その言葉を理解できたのはマーブルだけだった。ちなみにマーブルはカーシャのフードに隠れている。

「まだ根に持っていたのかにや」

はじまりはワインの空き瓶だった。それがいつの間にかこんな展開になっていたのだ。

蒼いマナフレアがカーシャの周りを飛び交う。

危険を感じたマーブルが叫ぶ。

「フェリシアちゃん伏せるにや！」

なんで伏せなきゃいけないかは肌が感じていた。危険な空気が辺りに立ちこめている。

カーシャは円を描くようにホウキを振り回した。

極寒の北風が吹き荒れた。

凍える空気、止まる刻、死せる心臓の鼓動。

ヴィーングたちが一瞬にして凍りづけにされ、ヒビが入って砕け散った。

カーシヤはホウキにまたがり、フェリシアの腕を掴んで強引にホウキに乗せた。

「作戦変更よ。もうこんな船なんかいらぬわ」

フェリシアを乗せてカーシヤのホウキが上空高く舞い上がった。

崖の上から放たれる矢の雨。

カーシヤは冷たい吐息を吐いた。

飛んできた矢が凍り付いて碎け散る。吐息で船を沈めたというのは、あながちウソではないかもしれない。

さらに吐息は崖の上にいた弓使いを凍りづけにした。

巨大な船の上ではヴィーングたちが争いを続けている。

その戦いにカーシヤは終止符を打とうとしていた。

「神々の母にして我が母ウラクアよ、その冷徹なる心に吹雪く極寒の風……」

それは古代魔導ライラの詠唱だった。

「アイーダ海の白い悪魔」のライラ　その威力の壮絶さは

見なくとも予想できた。

しかし、そのことよりもフェリシアの心に抱かれたのは……。

「（我が母……まさか「アイーダ海の白い悪魔」は女神の……）」

神々の母にして、氷の女神ウラクア。

長い詩を読み終えたカーシヤが高らかに唱える。

「ウーラティカアイス！」

巨大な氷の塊が隕石のように次々と降り注ぐ。

氷塊は船を壊すだけでなく、海面に落ちて上がった飛沫をも凍らせ、辺りを一瞬にして銀世界へと変貌させた。

破壊された巨大船は沈むことなく、凍った海に閉じこめられた。

涼しい顔しているカーシャ。これで実力を出し切ったとは思えない。

フェリシアは「悪魔」の意味を知った。

「(国を滅ぼすどころじゃない。この力があれば世界だって滅ぼすことができる。これじゃまるで破壊神だ)」

地上から生が消えた。まるでそこは死の大地と呼ばれるウーラティア大陸のようだ。

カーシャは崖の上に降り立った。

降ろされたフェリシアは強ばった表情で地面にあぐらをかいた。

そんなフェリシアにワインを勧めるカーシャ。五本目を隠し持っていたのだ。いったいどこに？

「戦いのあとにはワインに限るわよね。アンタも飲むでしょ？」

「未成年にアルコールを勧めちゃダメだにゃ」

すかさずマーブルのツツコミ。

「別にいいじゃない、誰も見てないし」

ここにいるのは三人と一匹、それと凍りづけにされている弓使いたちだけのハズだった。

その気配に気づいたときには、カーシャの首に短剣が突きつ

けられていた。

「動くな、アイーダ海の白い悪魔」

静かで淡々とした声。

辺りは黒装束の部隊によつていつの間にか囲まれていた。

フェリシアが声をあげた。

「ランバードの忍者部隊かっ！」

黒装束の男がフェリシアの前に膝をついた。

「ご無事でなによりですフェリシア皇女。皇女を誘拐したあの女は我が部隊の手中です」

それを首に短剣を突きつけられたカーシャのことをだった。

「違う、彼女は俺を……」

誤解を解こうとフェリシアがしゃべろうとするが、途中でカーシャが口を挟んで最後まで言わせなかった。

「まつ、世の中こんなもんよね」

疾風のような素早さでカーシャは自分の真後ろにした男の脇腹に肘を入れ、首から短剣が離された隙について崖から飛び降りた。

フェリシアが声をあげる。

「あっ！」

次の瞬間、ホウキに跨ったカーシャが崖の下から現れた。

「さよなら皇女様、今日は楽しかったわ」

軽やかに手を振ってカーシャは広い海の向こうに消えた。

こうして、アイーダ海の白い悪魔の悪行のひとつに、ランバード皇女誘拐が付け加えられたのだった。

歴史は真実を語るものではない。

ちなみにマーブルは崖の上に残され、忍者部隊に囲まれながら人形フリでやり過ごしたのだった。

恥ずかしげな林檎

《一》

学生でもないのに、何気ない顔をしてクラウド魔導学院の廊下を歩くセツ。

「侵入するのは意外に楽でしたけれど（ルーファス様はいずこ？）」

楽と言いつつも、すでに放課後。朝からルーファスの追っかけをしたにもかかわらず。

放課後になってしまったことで、教室にいた生徒たちが溢れ出してくる。この中でルーファスが探すのは難しいだろう。見つける前に帰宅されてしまう可能性もある。

セツが目を配りながら歩いていると、ピンクのツインテールをスキップしながら近づいてきた。

鉢合わせする前に　と、セツが隠れる前に見つかってしまった。

「あーっ、セツ！」

「セツですが何か？」

「なにかじゃないよ、なんでガッコーの中にいるの!？」

「いちゃ悪いですか？」

「悪いに決まってるよお。そーゆーのふほーしんにゆーってゆ

「んだよ」

「では、そういうことで」

冷たい態度でサラツと回れ右。セツは足早にこの場を立ち去るうとした。

が、その目に飛び込んできたルーファス。

慌ててセツは物陰に隠れた。なぜかビビを引っ張って。

「なんであたしまで隠れなきゃならないの？」

「少し黙っていてください」

「まあ（自分勝手なんだから）」

ふいつとそっぽを向いたビビだが、すぐに気になってセツと同じ方向を見た。

ルーファスだけなら、隠れたり、気になったりはせず、さっさと本人の前に顔を出していただろう。

なんと！

ルーファスが女の子といっしょなのだ！！

あっ……違った。オカマといっしょだった。

ルーファスとユーリがなにやら話をしている。

内容までは聞こえてこないが、怒ってるユーリにルーファスがビビっているのはわかる。

急にユーリが笑顔になった。

ルーファスがユーリになんかを渡した瞬間だ。

いったいなにを渡したのだろうか？

気になるセツ。

「今の見ましたか？ ルーファス様が女の子にプレゼントを渡

しましたよ、わたくし以外の女の子に」

「ルーちゃん最近あの娘」こと仲いいみたい」

二人ともユーリが男子だということを知らない。ちなみにルーファスも知らない。

ユーリとルーファスが別れた。

何も言わずセツはユーリを追った。ルーファスではなく、ユーリのあとを追ったのだ。

ふと、セツが横を見るとビビがいた。

「なぜついてくるのですか？」

「あたしの勝手じゃん」

「ふん」

プイツとセツはそっぽを向き、ビビもプイツとそっぽを向いた。

中庭までやって来た。

噴水の見えるベンチに座ってメモを見ているユーリの姿。

「ウソかよっ！」

突然、ユーリが大声を出して、ハツとした顔をして慌てて周りを見回した。

びっくりドツキリしたセツとビビは、噴水の周りにある彫刻のフリをして硬直した。

気を取り直した様子のユーリが再びメモを読み出したようだ。メモにはいったい何か書かれているのか？

さらにセツとビビはユーリに接近。

気づかれないように、気づかれないように、噴水の音よりも

静かに気配を消して、そっつと近づく。

急にユーリが立ち上がった！

慌てたセツとビビは地面に伏せた。ユーリとの距離はすぐそこ。二人はユーリがいるベンチの真後ろに伏せていた。

「ビビちゃんと仲直りしなくちゃ！」

「んっ!?」

驚いて声を出そうとしたビビの口をセツが手で押さえた。

ユーリには気づかれなかったようだ。

瞳を丸くしたビビはセツと顔を見合わせた。

「(どっぴりっぴりっ)」

「(こっち見られてもわかりませんよ)」

「(仲直りって、なんかあったっけ?)」

「(ビビとこの子は仲が悪い。ということとは敵の敵は味方と言いたいところだけれど、この子とルーファス様の関係も気になる。うーん)」

「(思い出せないいっっ)」

「(悩ましいいっっ)」

顔を見合わせながら、二人はう　こしてるような苦しそうな表情をした。

それを掻き消すように漂ってきた香水の匂い。

気配ゼロで空色ドレスの麗人がユーリの前に立っていた。

ユーリが瞳をキラキラさせる。

「あ、ローゼンクロイツ様」

「そっだよ、ボクはローゼンクロイツだよ(ふにふに)」

「そういう意味でお名前を呼んだのではなく……まあいいです
ところで、メルティラブでの一件のあと、ローゼンクロイツ様
はどうなされたのですか？」

「なにそれ？（ふにゆ）
がーん！」

ユーリだけでなく、ビビもショック！

現場で散々な目に遭わされたビビショック！

という詳細は『マ界少年ユーリ・第二話ドリームin夢フ
フ』を読んでね！

魔導士ルーファスの一五話ともリンクしてるよ！

慌ててユーリが話し出す。

「ええっと、あのお店と一緒にスイーツを食べながら、アタシ
とビビちゃんとお話したのは覚えていらっしやいますよね？」

「……… 忘れた（ふあふあ）」

ユーリちゃんショック！

「あはは、そ……… そうですね。え、でも、 猫還り をしてお
店を破壊したのは知っていますよね？」

「……… らしいね（ふう）」

猫還り したローゼンクロイツは、その間の記憶がぶつ
り途切れる。酒飲んで、暴れて、覚えてないパターンと同じだ。
「キミたちが外に出されたあと、ヤツの秘書が現れて事態を収
拾したらしいよ。お店もヤツがお金を出して立て直すらしい……
ヤツに借りを作るなんて苦笑（ふっ）」

本当に嫌そうな顔をしてローゼンクロイツは口元を歪めた。

慌ててユーリは話を逸らそうとする。

「ところで、こんなところでなにをなさっていたのですか？
まさか、アタシを見つけてわざわざ声を掛けに来てくださった
とか？」

「……迷った（ふあふあ）」

「はい？」

「家に帰りたいのに学院から出られない（ふう）」

「……あはは、迷子になられていたのですね。だったら、アタシが送りましょうか？」

「別にいいよ、明日も授業あるから（ふあふあ）」

「……あはは、そうですね。明日も授業ありますもんね！」

ローゼンクロイツはふあふあ歩き出した。

そんな後ろ姿を見ながらユーリは誓う。

「もうアタシは止めません。貴方は貴方の信じる我が道を突き
進んでください」

そして、ユーリもこの場から駆け出していった。

ひらり

メモが地面に落ちた。ユーリの落とし物だ。

緊張を解いたセツは息を吐いてメモを拾い上げた。

「いつ見つかるのか冷や冷やしました」

同じくドツと息を吐いたビビ。

「ふう。でもローゼンには見つかった気がするけど（チラ見
された気がするし）」

「ところで、あのローゼンクロイツとかいうひとは、本当に男

「なのですよね？」

「うん、ルーちゃんの幼なじみの男の子」

「あんな格好をしているということは、恋愛対象はやはり殿方……なのは」

「う〜ん、ローゼンって恋愛とかそういうの無いと思うけど。」

「ひとを好きになるってあるのかぁ（でも……ローゼンも人並みに恋とかしたら）」

「このとき、ビビとセツの頭の中には同じカップリングが浮かんでいた。」

「ビビが髪の毛をかき乱す。」

「うわあ〜っ、ないない！」

「わたくしはアリかと。ローゼンクロイツさんに恋愛感情がなければの話ですが」

「BL好きなの？」

「女装っ娘」こと絡みはBLなのでしょうか？」

「あたしに聞かないですよ！」

「ビビは顔を真っ赤に染めた。」

そして、話を変えようとした。

「さっきのメモは、メモ！ あのメモなんだったの？」

「そうでした（まさかラブレター、なんてことはわたくしのルーファス様に限ってないと思いますが）」

セツはメモを開いた。

ビビが首を伸ばして覗き込む。

カーシャちゃんドキドキわくわく媚薬の使い方講座

「どうやらカーシャの手書きメモらしい。というか、イマドキこんな丸文字使うひといないぞ。しかもいい歳なのに。」

セツは難しい顔をして眉を眉間に寄せた。

「媚薬って惚れ薬ということですが」

この媚薬の使い方は居たって簡単、注射器で相手のケツにプチ込め！

続きを読んで二人とも啞然。

ケツにぶち込める状況ってどんな状況だよ。かなりの強攻策じゃないか。

「というのはウソで。」

「ウソかよ……」

ビビとセツは仲良くハモってしまった。同じセリフをユーリも言ってた気がする。

メモには裏面があった。

この惚れ薬はまだ完成していない。完成させるためにはお前の体液が必要だ。この薬とお前の体液を混ぜ、それを相手に飲ませることにより効果が発生する。ちなみに混ぜる体液によつて効果の度合いが変わってくるので注意しろ。妾のおすすめの体液はピーとかピーとか、ピーだな。

怪しむような顔をするセツ。

「ピーってなんですか、ピーって。伏せ字にすると卑猥ですし、ここが重要な点ではないのですか？」

「体液って三つもあったっけ？」

「汗、唾液……ってなにを言わすんですか！」

セツはなぜか顔を真っ赤に染めて、頭のとっぺんから蒸気を噴き出した。

瞳を丸くしたビビは首を傾げてきょとんとした。

「三つ目ってなに？」

「そんなこと自分で考えればいいでしょう」

「教えてよぉ、イジワルぅ」

腕に抱きついてきたビビを振り払おうとセツが腕を振る。

「ちよつと離れなさい。馴れ馴れしくしないでください」

「いいじゃん、あたしたちトモダチでしょ」

「いつから友達になったんですか、わたくしには覚えがありませんが」

「え？ 違ったの？」

ビビの表情は真顔だった。

そんな顔を見てセツも真顔で少し驚いた顔をした。

「え？（そんな目で見られても）」

「あたしはトモダチだと思ってたのになぁ（ちよつぴりシヨックだなぁ）」

「本気で言っているのですか？」

「一度会ったらみんなトモダチだよ」

「あ、ああ、そうなのですか……（本気なのかわからない）」
心の声が聞こえればいいが、疑心を持った者は考えれば考えるほど、疑いの心は強くなる。

セツにとってルーファス様に近づくの女は、ぜ〜んぶ変な虫。そういう目で見ている限り、セツは相手の心がよく見えな

もしれない。

セツが持っていたメモをビビに奪われた。

「なにを！」

「カーシャのところにレッツゴー！」

駆け出すビビ。

髪のをかき上げながら溜め息を吐いたセツは、ふと笑ってビビを追いかけた。

カーシャは学院内にある自室にいた。

ドアを開けて元気よくビビが飛び込んできた。

「カーシャさん遊びに来たよぉ」

「勝手に遊んでる、妾は忙しい」

赤ペンを持ったカーシャは答案の採点をしているらしい。

ビビがボソツと。

「教師っばい」

カーシャっばくない！

セツは感心したようにうまずいていた。

「この方、本当に教師だったのですね」

なんかカーシャが真面目に教師やってると、地震雷火事親父でも来るんじゃないかと思う。

激しい地鳴り。

稲妻のように部屋に飛び込んできた謎の影。

息を切らせ頭から湯気が出ている姿は、まるで家事のようだ。

「カーシャせんせーッ！」

ハゲオヤジが叫んだ。

うんざりした感じでカーシャは採点の手を止めた。

「今度はだれだ……ん、マツスルか（相変わらず油臭い。こやつが出て行ったらファブらなければ）」

ハゲオヤジこと魔武闘教師マックス。ハゲ頭の下はブーメラパンツ一丁のマツチヨボディ。いつもなぜかテカっている。特に頭が。

「カーシャ先生大変です！」

「大声出さんでも聞こえてるわ。で、なにが大変なのだ？」

「部外者が学院のセキュリティを破って侵入したそうですよ！」

連絡の電話入れたのに、カーシャ先生まったく出ないから、私に探して来いって言われて来たもんで！」

「部外者……か（こいつだな）」

と、カーシャはセツに顔を向けた。

冷や汗を流しながらセツはササツとビビの後ろに隠れる。

「（困りましたわ。このままでは突き出されて、これ以上この国で問題を起こすことは避けなければ。しかし、どうやって?）」

困り考えを巡らせているセツに、カーシャは意地悪そうに笑いかけた。

そして、マックスに向き直す。

「用件はそれだけか？ わかったらもう帰れ、部外者を見つけたら報告してやる」

「頼みましたよー、カーシャ先生はいつもテキトーなんですか

らー」

「わかった、わかった。シッシ」

虫でも払うようにカーシャはマックスをあしらった。

不安そうな顔をしてマックスが出て行ってすぐ、カーシャはセツに顔を向けた。

「妾の命令を一つ聞くか、それとも金を出すか、交渉に応じようではないか」

「条件によっては学院に侵入したことを黙っていてくれると？」

セツは真顔で尋ねた。

「だれが黙ってやると言った？」

「はい？」

悪意を込めてセツは聞き返した。

「黙ってやるのではない。正式な手続きを踏んで、お前をこの学院で自由に行動させてやってもいいと言っているのだ。なんなら入学手続きをしてもいいぞ？」

「この学院の教師と言えど、教師は教師。他国にも知れ渡る魔導の名門クラウス魔導学院に容易く入学などできるわけないではありませんか。わたくしをバカにしているのですか？」

と、横で聞いていたビビが、

「実は、ちよっとした特別なはからいであたし留学生扱いで編入して来たんだけど、あっさりと（のちのち知ったんだけど、やっぱり実家の力が働いてたみたいだけど）」

マジマジとセツはビビを見つめた。

「たしかに、魔族は元々魔力が強いとはいえ、あなたがこの学院に入学できるのはとても思えませんものね」

「うっ（言い返したいけど、言い返せない）」

ビビちゃんちよっぴりシヨック。

髪の毛をかき上げながらカーシャはウサギのマグカップを手にとった。

「ビビの編入は妾が通したわけではないが、最近ではユーリという小童「こわっば」を妾の力で編入させたやつたぞ。ふふっ、これでもなんでも屋カーシャ先生と呼ばれ、生徒たちが困ったときに最後に訪れるのは妾のものだ」

「ですが、カーシャさんから個人的に条件が出されると言うことは、正式な手続きではないということですよね？」

「書類は正式だ」

裏口入学！

セツは少し考え込み、口を開いた。

「わたくしにはわたくしの学業がありますから、編入の必用ありませんが、学院を自由に歩けるようにしてもらいたいのですか？」

「キャツシユで二〇〇〇ラウル。等価値であれば、他国の金でよいぞ。それとも別の条件にするか？」

条件を出されてセツはすぐにサイフから一〇〇〇ラウル紙幣を二枚出した。

「これでよろしいですか？」

「うむ、ならばこれを事務局に持って行け」

カーシャは机の引き出しから書類を出し、そこに指先を走らせ、魔法のサインを書いた。魔力によって書かれた文字や図形は、筆跡鑑定、そして魔力がDNAのように個人特定できるため、有効な署名となる。

飛び込んできた事態の解決に目処を付けると、セツは本題に入ることにした。

「もう一つ用件があるのですが」

「金さえ出せばなんでも聞いてやるぞ」

「これについてお聞きしたのですが？」

セツはカーシャの目の前にメモを突き出した。

《 二 》

その場所はいつしか 失われた楽園 と呼ばれていた。

広がる不毛の大地。砂埃が空に舞い上がる。遠く先の景色は霧に覆われていた。

「なぜあなたも付いてきたのですか？」

セツはイヤそくな顔をしてビビを細目で見た。

「おもしろいことはみんなで共有したほうがいいじゃん」

「……惚れ薬なんて手に入れて、“好きな殿方”なんていらっしやるのですか？」

「べべべ、べつに、好きな男の子はいないけど、楽しそうだから付いてきただけだから！」

「なら、わたくしの邪魔だけはなさないように」

セツはビビを置いて足早に歩き出した。

踏みしめる大地は固く、植物など育ちそうもない環境だ。

しかし、セツたちはここに林檎を取りに来たのだ。

惚れ薬としてカーシャが提示した材料。その中に“ロロアの林檎”という果実があつた。

春麗らかな四月を守護する女神の名はロロア。彼女は愛の女神であり、絵画では林檎を持ったポーズで描かれることが多い。その女神の名が冠された“ロロアの林檎”。

愛にはいろいろな形があるとはいえ、この荒れ果てた不毛の地にロロアの名がつく林檎などあるのだろうか？

この場所はカーシャに教わつた場所だ。つまりカーシャがウソをついていなければ、ユーリも同じ場所に来ているはず。そして、ユーリは“ロロアの林檎”を手に入れ、放れ薬を調査してもらつた。

地面に倒れている立て札をビビは見つけた。

「左に進むと温泉だつて！」

「温泉に行きたいわけではありません」

「水着持ってくればよかつたなあ」

「温泉に水着は必用ありません。それに倒れている立て札に、もはや道しるべとしての機能はありません」

セツは立て札に目を向ける。

左は温泉。

右は文字がくすんで読めない。

前に進むと、かすかに『の林檎』という文字が読める。

「よし、左に進もうっ！」

ビビは温泉に行く気満々。

ムツとするセツ。

「ひとの話を聞いていましたか？」

「温泉っ温泉っ」

スキップをしながらビビはさっさと進んでしまった。

セツは辺りを見回す。

立て札は倒れているため、示す方向が正しいとは限らない。

そのため、ビビが進んだ方向に温泉があると限らない。これから進むべき方向すらもわからない。

セツはビビのあとを追うことにした。

やがて前方に見えてきた水柱。

「見て見て、噴水だよ！」

ビビがはしゃいだ。

呆れたようにセツは溜め息をつく。

「あれは噴水ではなく間欠泉です」

「カンケツセン？」

「熱によって地面から噴き上げられる温泉です（あの看板が示す方向が正しかったということは、看板のところまで戻る必用がありそうだわ）」

「ねえねえ、あっちに湯船があるよ！」

ビビが走って行ってしまった。

残されたセツはビビを追わずに、来た道を引き返す。

「きゃーっ！」

若い女の悲鳴。

セツは厳しいかをして振り返った。

「ビビ？」

今の悲鳴はビビの声に似ていた。姿は見えないが、その可能性は高い。

セツはビビが向かった方向に走った。

硫黄の臭いが鼻を突く。

白い湯煙が視界を妨げる。

セツは瞳を丸くした。

「……サル!？」

しかし、それはサルよりも巨大だ。かと言ってゴリラらオラウータンではない。薄茶色の長い毛に覆われた巨大サル。巨漢のプロレスラーほどの体長がありそうだ。

「助けて！」

サルに抱きつかれて捕まっているビビの姿。その周りにもサルどもが群がっている。

視線を配ってセツはサルを数える。

「一、二、三、四、五匹。ビビを拘束しているサルを加えて六匹」

セツは鉄扇を構える。

が、サルどもは戦わずして走り出した。

ビビが叫ぶ。

「やだっ、離してーっ！」

そして、セツは呆然とした。

「バツシャーン！！」

水飛沫を上げながらビビを抱えたサルが温泉にダイビング。
全身びしょ濡れ。

服を着たまま温泉に強制入浴させられたビビは、この場から逃げようとしたが、サルによって両肩を下に押されて、湯船から出してもらえない。

「うわぁ〜ん、パンツの中までびしょびしょだよぉ」

意図が見えてこないサルどもの行動に、セツはただ啞然として見つめることしかできなかった。

「急いで助ける必用はなさそうですが……はっ!?」

殺気を感じたセツが身構えた。

しかし、遅い！

巨大なサルの影がセツの眼前を覆う。

「きゃっ！」

サルに抱きかかえられたセツ。

逃れる間もなく、セツも温泉にダイブ！

「バツシャーン！！」

全身びしょ濡れ、着物のセツにはそーとー答えた。

髪から水を勢いよく飛び散らせながらセツが怒りを露わにした。
「……」

「いったいなんのつもりですか！」

「ウツキー、ウツキーッ！」

サルには言葉が通じないようです。

言葉が通じない相手には態度で示すしかない。

「この芭蕉扇でおまえたちを温泉ごと吹き飛ばしてあげましょう。湯の一滴も残しませんから、覚悟なさい！」

セツが鉄扇を振るおうとしたとき、その手首がひやりとするものに押さえられた。

「たかがサルに目くじらを立てるでない」

威厳を含んだ女の声。

「ウツキーツ！」

サルがお湯を若そうな女にぶっかけた。

「サルの分際で我に喧嘩売つとるのかっ！」

女は湯船に手を付け、水を操り渦巻く巨大水鉄砲で巨大サルを吹き飛ばした。

セツが呆気にとられる。

「言ってることとやってることが違うのでは？」

「しょせん猿は猿。我らのような高等な種族ではない」

女に見つめられたセツは身を強ばらせた。女の眼は人間の眼ではなかった。まるでそれは蛇の眼だ。

そして、女は眼だけではなく、その体の一部も鱗で覆われていた。

「温泉で他人の裸体を無遠慮に見つめ続けるのは失礼だぞ、人間の娘よ。そして、そこにおるのは魔族の娘か」

女の視線の先でビビはすっぴかりのぼせ上がっていた。

この女はいったい何者か？

女は肩まで湯船に浸かって安らかな表情をした。

服を着たセツは膝まで湯に浸かって立ったまま。女が気にな
って視線が外せない。

目をつぶっていた女は、まだ向けられている視線に気づいて、
視線を返した。

「服を脱いでお前たちも体を休めるがよい。ほれ、そこにある
平らな岩は高温を発してある。服を広げておけばすぐに乾くだ
ろう。」

温泉に入りに来たわけではないが、疲れを感じていたセツは
ここで休むことにした。

とりあえずのぼせたビビを外に放り出す。女が睨みを効かせ
てくれたお陰で、サルに邪魔されずに済んだ。

それからセツは服を脱いで湯船に浸かることにした。

湯は乳白色で、少し甘い香りがする。

「先ほどまで、こんな匂いは……。」

セツが呟くと女が微笑んだ。

「私の汗が滲み出ってしまったようじゃ。」

「……汗？」

「そう嫌な顔をするな。汗と云えど、私の汗は妙薬にもなる特
殊な汗じゃ。」

「何者なのですか、あなたは？」

「ただの林檎の管理者じゃよ、名はスラターン。」

「林檎！」

声を上げたセツ。

蛇の眼でスラターンがセツを睨みつけた。

「お前たちも盗人か？ ならば万死」

「ちよつと待ってください！」

「問答無用。“智慧の林檎”は何人にも渡さぬ！」

「（“智慧の林檎”？）違います、わたくしは“ロロアの林檎”を採りに！」

セツは息を呑んで喉を鳴らした。

牙を剥いたスラターンの顔が目の前で制止していた。

あと刹那遅ければ、喉を噛み千切られていた。

「そうならそうと早う言え」

「（早くも何も、いきなり襲ってきて何を）薬の調合に“ロロアの林檎”が必要なのです」

「惚れ薬か？」

「えっ」

まさか言い当てられようとは、セツは気まずい顔をして固まった。

「つい先日来た魔族の娘も惚れ薬をつくるとかで、“ロロアの林檎”を買って帰ったぞ」

「……買って？」

「“ロロアの林檎”なら売店に売っておる」

「……売店？」

「加工品も数多く取り揃えておるぞ。中でもリンゴパイは定番のおみやげじゃ」

「観光地!？」

周りの殺風景な不毛の大地を見ると、寂れきった温泉街とい

うこところか。

スラターンは遠い目をした。

「ここが真にロロアの楽園であったころは、それは賑わいを見せる観光地じゃった」

「そんな昔から観光地なのですね」

「今では年間来園者は一〇〇人にも届かぬ。“智慧の林檎”を求め我に挑む猛者も少なくなり、実に退屈な日々じゃ。今ではサルを相手にしている日のほうが多い」

「はあ、そうなのですか（だから？）」

本音では、そんな話を聞かされてもどしようもないと思ってる。

それに、湯の温度が熱いために、もう少しのぼせてきた。

セツは湯を出ようと立ち上がろうとした。

「では、わたくしは先を急ぎますので」

「まあよいではないか、服もまだ乾いておらんだろう。猿は話し相手にはならんのでな、こうやって話ができる相手がいることが嬉しいのじゃ。して、惚れ薬をつくるということは、思い人があるのか？」

「おります」

セツは柔らかな笑顔で答えた。

それをビビは足湯をしながらつまらなそうに聞いていた。足を揺らして水を蹴る。飛び散る飛沫。

「ねえ、温泉にも入ったしもう帰ろうよお」

「なにをおっしゃってるのですか、わたくしは“ロロアの林檎

”を手に入れるためにここに来たのです。あなたは勝手に付いてきたのだから、勝手になさいませ”

セツは冷たくビビに返した。

顔を赤くしてビビは頬を膨らませた。

「まだ帰らないもん」

「勝手になさい」

再びセツは冷たくあしらった。

「あーっ！」

と、ビビが叫び声をあげ、セツはうんざりした顔をした。

「今度はなんですか？」

……サル。

セツの瞳に飛び込んできたのは、サルがセツの服を持って逃走するシーン。

「……………」

状況把握に時間を要するセツ。

そして、状況を理解した！

「わたくしの服！！」

叫んだセツは勢いよく温泉を飛び出し、駆け出そうとしたが、目の前に両手を広げて立ちはだかるビビ。

「だめっ！」

「わたくしの邪魔をする気ですか！」

「……その格好で行くの？」

「……あっ」

セツは自分の姿を見て、顔を赤くすると温泉に再び浸かった。

すっぽんぼんで大地を駆けるわけにはいかない。野生児か、公然わいせつだ。

ビビが上着を脱ぎはじめた。

「あたしの貸してあげるよ。まだ湿ってるけど」

「(……ゴウ) ありがとうごさいます」

ビビに服を借りてセツは着替えた。

そして、ビビが『よいドン』の構えをした。

「よし、がんばってサルを捕まえようっ！」

「つて、その格好で行くんですか、あなたも？」

「だってスカート貸しちゃったし」

パンツ丸だしのビビ！

そして、ノーパン、ノーブラのセツ！

ちなみにビビのパンツはピンクのストライプだ。

パンツ丸出しのビビも恥ずかしい格好だが、スカートのセツは危険だ。

「上着とスカートだけでなく、全部貸していただいたほうが…

…」

「でも一人より二人のほうがいいよっ！」

自信満々でビビは言い放った。

そうだっ！

セツはあることをひらめいた。

「スラタンさん、服をしばらく貸していただけませんか！」

「服などない、我は常に全裸だ」

野生児！

セツは今の課程をなかつたことにした。

「それではサルを追いましょう！」

スカート揺らしながらセツが駆け出した。

すぐにビビもあとを追う。

見晴らしのよい不毛の大地だが、サルどもの姿はすでない。

手がかりは？

ビビは遠くを指差す。

「あつちになにかいるよ？」

その方向をセツも見したが、視覚でも気配でもなにも知覚できない。

「本当ですか？」

「うん、生き物なら五〇〇メートルくらい先まで感知できるよ。

それがどんな生き物かまではわからないけど」

「(魔族の超感覚)今はあなたを信じるしかなさそうですね」

ビビの示した方向へ進む。

やがて見えてきたのは岩山だ。

人影？

いや、サルだ。

岩山の影からサルがわき出してくる。

「ウツキー！」

「キーキーッ！」

「ウツキツキー！」

威嚇するようにサルが鳴いた。

猿山の頂上にひときわデカイ影が見えた。

ボスザルだ！

周りのサルも巨大だが、ボスザルはさらにデカイ。全長四メートル（四・ハメートル）はありそうだ。

セツは声をあげる。

「あれは！」

ボスザルの周りにはいる巨乳のメスザルが、なんと服を着ている。そう、セツの服だ。しかも鉄扇まで取られている。

セツはビビを見ずに話しかける。

「魔法は使えますか？」

「初歩的なのならあゝ、使えるかなあー、あはっ」

「わたくしも同じですが、肉弾戦ならあなたより強い自信ありますよ」

「あたしだって！」

ビビは自分専用の異空間倉庫から大鎌を召喚した。今日のビビちゃんはマジだ。その証拠に瞳が紅く色づいている。

サルどもが岩山を飛び降りてくる。数はおよそ一〇以上。

迎え撃たずにセツは攻め込んだ。

「サルは縦社会です。雑魚に構わずボス猿を狙います！」

しかし、そう簡単にボスザルには近づけない。

ボスザルがいるのは岩山の頂上だ。そこまでには何匹ものサルが襲い掛かってくる。

「なら雑魚はあたしに任せて」

ビビが大鎌をサルに振り下ろした。

この大鎌は肉を断つことはない。

まるで空気を斬るように、大鎌はサルのを擦り抜けた。

そして、ビビの手に握られているゆらめく炎のようなモノ。

「あとでこの魂は返してあげるね（美味しそうじゃない

っ）」

カワイイ顔をしてても悪魔は悪魔だ。

セツはサルを岩山から蹴落としながら頂上を目指していた。

下からビビの声がする。

「気をつけて！」

「こんなサルにやられるわたくしでは」

「スカートの中見えちゃうよ！」

「そういう大事なことは早く言ってください！」

スカートを押さえて攻撃力、機動力が格段に下がった。

セツにサルが飛び掛かってきた。

臆することなくセツは相手の懐に入り、アゴに向けて掌底を放った。

さらに後ろから来たサルには、踏み込みからの肘鉄。

そして、また後ろから迫ってきたサルには、回し蹴りを

踏みとどまって、体を回転させながら裏拳を放った。

三発の攻撃を三匹のサルに食らわずに要した時間は約一秒。

流れるような攻撃だった。

セツは頂上を見上げた。あと一步でボスザルだ。メスザル以外はもう立ちほかかるサルはいない。

ボスザルが動いた！

四つ足で岩肌を蹴り上げ、セツの目の前まで来ると右フック

を放ってきた。

セツは右フックを飛び退いてかわすと、すぐに踏み込もうとしたが、ボスサルはフックを放つてすぐに身を引いて距離を取っていた。

「狙うはボスザルですが……」

ちらりと服を着たメスザルを横目で確認したセツ。

再びボスザルが右フックを放ってきた。

「ファイア！」

セツの手から炎が放たれた。

怯んだボスザル。これでいい。魔法が得意でないセツは、これでボスザルを倒すつもりはなかった。

すぐさまセツが向かっていたのは服を着たメスザルの元だ！セツはメスザルから自分の鉄扇を素早く奪い返し、すぐに突風を巻き起こした。

風はボスザルを呑み込み、その巨体を大きく吹き飛ばした。もう岩山の頂上にボスザルの姿はない。

そこに立っているのはセツ。

「弱肉強食です。さて、服を返してくださいませね？」

笑顔でセツはメスザルに話しかけた。

が、メスザルは服を着たまま逃亡！

笑顔から一変してセツがゴリラの形相で怒る。

「なに逃げとんのじゃコラッ！」

ボスが倒されたサルの社会に戦国時代が幕を開けた。

このときを逃すまいと、ボスザルの座を巡ってサルどもがセ

ツに襲い掛かってきた。

「が、今のセツに挑むなど……。」

「おんどりやー、道を開けんかボケカスツ！」

鉄扇が巻き起こす嵐。

逃げ出すサルども。

逃げ出すビビちゃん。

みんな涙目。

逃げ出したサルどもの前に壁が立ちはだかった。そんな壁、さつきまではなかったはずだ。

ビビは顔を上げた。そのまん丸な瞳に映るシユルシユルと舌を鳴らす大蛇の顔。

「猿どもよ、悪戯はそこまでしておくのじゃ」

低く大地に響く声。

サルどもは一網打尽にされた。大蛇がすべてのサルを囲い込んでしまったのだ。

セツはすでに服を奪い返して着替えを素早く済ませていた。

「どこのどなたか存じませんが、ありがとございました。これはあなたにお返しします」

大蛇に頭を下げてから、セツは服をビビに貸した。

機械的に服を受け取ったビビは、ハツとして我に返った。

「てゆか、もつと驚こうよ！ 大蛇だよ、ものすつごい大きい大蛇だよ！ あたしたち食べられちゃうかもしれないんだよ焦るうよ！」

この大蛇にかかれば、ビビたちなど丸呑みだ。

だが、大蛇にその気は毛頭なかった。

「裸の付き合いをした者は取って食ったりはせぬ。我がだれだかわからぬか？」

ここまで言われれば、わからないはずがない。

「スラターンさん！」&「スララーン！」

同時に声をあげた二人。ビビのほうは聞き流すことにしよう。スラターンは姿も違い、声はその巨大な体のせいだろう、太く響く声だ。すぐにわからなかったのも無理もない。

「我に乗るがよい。『ロロアの林檎』を売っておる売店まで案内しよう」

と、申し出くれたスラターンにセツは、

「では、出口までお願いします」

スラターンは不思議そうな顔をした。

そんな顔をしたのはビビもだ。

「リングゴは？」

「もう疲れてしまつてそんな気分ではありません。わたくしは帰りますが、欲しいのなら勝手にひとりでお残りになれば？」

「セツたんが帰るならあたしも帰るうー。もう十分遊んだし」
すでにセツはビビに背を向けて、スラターンの頭に乘せてもらつていた。

そして、誰にも聞こえないようにセツがつぶやく。

「……セツたん（なんて、はじめて言われた）」

一息ついたセツは、頭によじ登ってくるビビに手伸ばして貸した。

伸ばされた手をしっかりとつかむビビ。

「ありがとう」

ビビは満面の笑みだった。

顔を背けたセツは少し恥ずかしそうに顔を赤くしていた。

おしまい